文化財保護課

後閑II遺跡

—上川渕公民館建設事業地内発掘調査—

昭和58年度

前橋市教育委員会

前橋市大手町二丁目12番1号
前橋市教育委員会社会教育課
担当　文化財保護係

序

近年、前橋市でも、人口の増加・核家族化の傾向が進むにつれ、住宅や社会教育施設の不足が社会問題にもなっています。

上川渕公民館は、建築後17年を経過し、老朽化するとともに人口が急増してきたため、現施設では生涯教育活動に対応できなくなってきています。そこで、移転、新築を行うものです。

ところで、市民の社会教育活動の中心となる公民館建設事業と埋蔵文化財保存の問題は、常にうらはらの関係にあり、文化財保護という立場から両者の調整に努力しているところであります。

ここに報告する後閑II遺跡もそのひとつで、調査については記録保存のための発掘調査を実施してまいりました。

調査の結果、古墳時代から中世にかけての竪穴住居跡、掘立柱建築跡、井戸跡、土壙、溝跡等の数多くの遺構や遺物が発見され、貴重な資料を得ることができました。ここにその成果の一端を報告いたします。

この調査を実施するにあたり、終始ご協力をいただいた社会教育施設係の方々等、また直接調査に携わっていただいた作業員の方々に対して、厚くお礼を申し上げ、感謝する次第であります。

最後に、本調査報告書が一人でも多くの方々に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

昭和59年３月31日

前橋市教育委員会

教育長　金　井　博　之

前橋市教育委員会社会教育課
担当　文化財保護係

目　　次

序　　文
目　　次　例　　言
I　遺跡の位置と環境……1
II　発掘調査の概要……3
1　調査の経過と方法……3
2　地　　層……3
3　検 出 遺 構……3
4　遺 構 と 遺 物……8
(1)　住　　居　　跡……8
(2)　掘立柱建築跡……30
(3)　井　　戸　　跡……31
(4)　土　　壙……32
(5)　溝　　跡……33
(6)　水　　田　　跡……34
III　ま　　と　　め……34

例　　言

1. 本報告書は、前橋市後閑町に所在する後閑II遺跡の昭和58年度発掘調査の概要である。
2. 調査主体は、前橋市教育委員会である。
3. 発掘調査の要項

   調 査 期 間　昭和58年８月12日～昭和58年９月14日

   調 査 場 所　前橋市後閑町35番地、外５筆

   発掘担当者　前原照子、岸田治男、林喜久夫、鵜木晋一、前原　豊、中野和夫、江部和彦、木暮　誠、福田瑞穂

   調 査 面 積　1500m²
4. 本書の執筆は林喜久夫が行い、遺物の実測、製図及び写真撮影等は、調査担当者及び高島康、水野キクエ、中村キヌエが分担して行った。
5. 本発掘調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会で整理、保管している。
6. 調査にあたっては、社会教育施設係の人々をはじめ発掘作業員の方々の御協力をいただいた。
7. H…住居跡、B…掘立柱建築跡、I…井戸跡、D…土壙、W…溝跡、S…石を表わしている。
8. 遺構挿図中、平面図における [___] は、焼土と炭化物が堆積する範囲を表わしている。

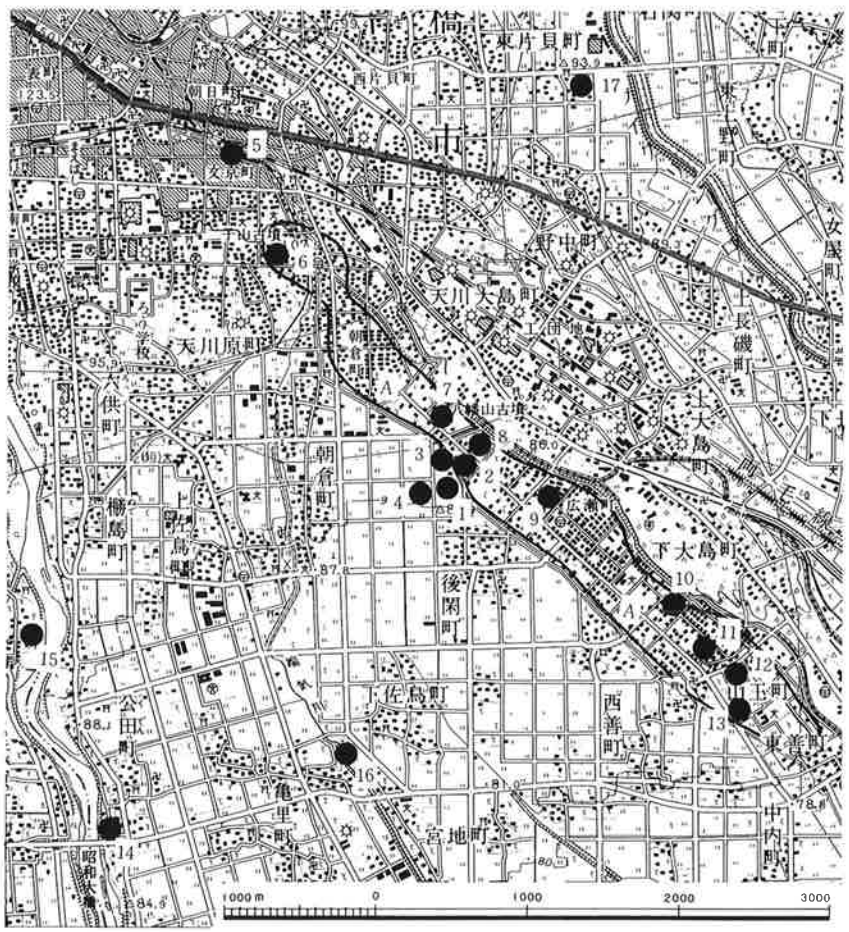
Ⅰ　遺跡の位置と環境

本遺跡は、市街地より南東へ約２kmの距離にある。東側に広瀬川が流れ、遺跡はその右岸に沿った微高地上に位置している。地目は桑畑である。西側には藤川、端気川が流れており、周辺は水田地帯である。標高は90m30cm内外である。

遺跡地周辺の歴史的環境をみると、旧上川渕村に（上毛古墳綜覧による）113基の古墳群の存在が確認されていた。しかし、大部分の古墳が開発のために、未調査のまま破壊されている。現存している古墳は、八幡山、天神山、亀塚山、金冠塚、文珠山、阿弥陀山等の数基だけになっている。また南西側の水田地帯には、古代条里制地割の跡も認められる。

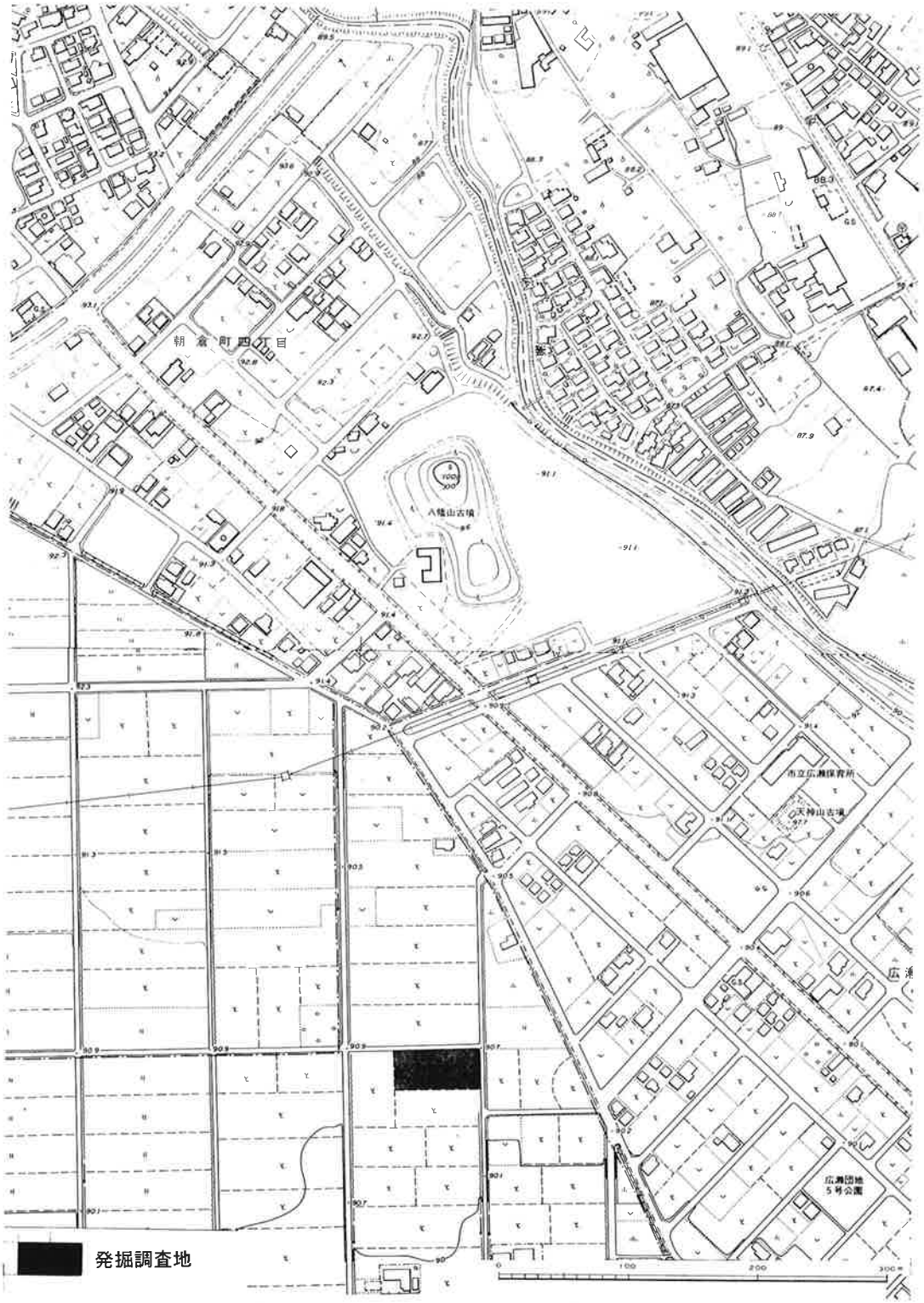
一方、最近では分譲住宅建設や住宅団地建設に伴う発掘調査が行われ、後閑団地遺跡や坊山遺跡からは、古墳時代から平安時代にかけての住居跡、井戸跡、土壙等が確認されている。

以上のことから、本遺跡地付近は、古代東国の歴史を知るうえで注目すべき地域と考えられる。



1	後閑Ⅱ遺跡
2	坊山遺跡
3	後閑団地遺跡
4	後閑遺跡
5	不二山古墳
6	二子山古墳
7	八幡山古墳
8	天神山古墳
9	飯玉神社古墳
10	亀塚山古墳
11	金冠塚古墳
12	文珠山古墳
13	阿弥陀山古墳
14	浅間神社古墳
15	下新田遺跡
16	川曲遺跡
17	桂萱大塚古墳
A	広瀬古墳群

第１図　後閑Ⅱ遺跡の位置と周辺遺跡（1/50,000）



第2図　調査区周辺地形図(1/5,000)

II　発掘調査の概要

1.　調査の経過と方法

上川渕公民館の老朽化と人口増加にともなう移転・新築のため、建設に先だって敷地内5374.45㎡に対して確認調査を実施したところ、遺構が濃密に存在することがわかった。そこで、館舎建築予定地内約1,500㎡について、８月12日～９月14日にかけて発掘調査を実施した。

調査方法としては、平安時代の水田跡と古墳時代から中世にかけての住居跡等の年代を異にした遺構の存在が確認されたため、２面調査を実施することにした。

2.　地　　層

発掘調査地の層位を図示すると、右図の通りである。

第Ⅰ層　褐色土層。耕作土。わずかに粘性を有し、しまりがある。A軽石を５～10%含む。

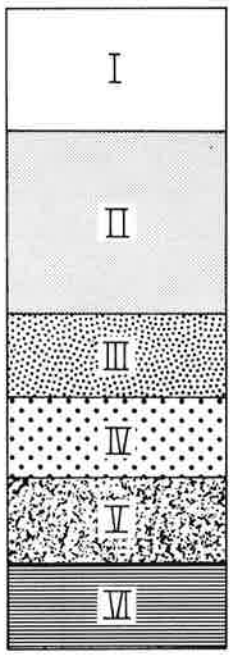
第Ⅱ層　灰褐色土層。B軽石と灰を含む層。粘性はないがしまりがある。上・下部に鉄分が沈着。

第Ⅲ層　灰黒色土層。少量の炭化物を含む。粘性としまりがある。層の厚さは27cmである。

第Ⅳ層　黄褐色土層。多量のFA軽石を含む。上部はFAの灰が主である。きめの細かい砂質で粘性に富む。

第Ⅴ層　黒褐色土層。微砂を含むとともに非常に粘性がある。しまりもある。層の厚さは約16cmである。

第Ⅵ層　黒色土層。上部にC軽石純層を含む。下部は微砂を含む。



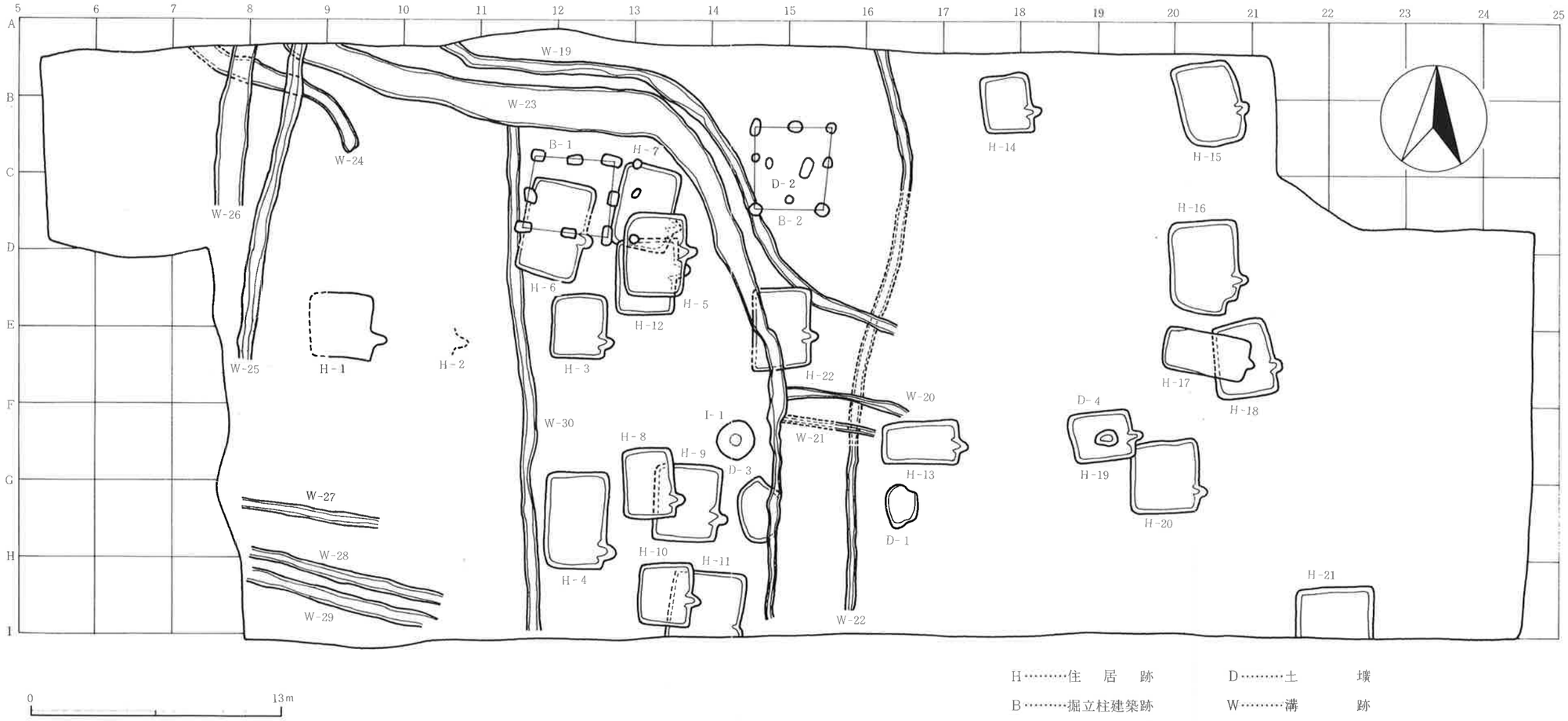
第３図　層序模式図

3.　検　出　遺　構

本年度の発掘調査の結果、検出した遺構は古墳時代から中世に及び、竪穴住居跡22、掘立柱建築跡２、井戸跡１、土壙４、溝跡30、水田跡１で、遺構総数60であった。

第１表　検出遺構一覧表

時代＼遺構	竪穴住居跡	掘立柱建築跡	井戸跡	土　壙	溝　跡	水田跡	総　数
古墳時代	1	0	0	3	3	0	7
奈良時代	2	0	0	0	2	0	4
平安時代	19	0	1	1	23	1	45
中　　世	0	2	0	0	2	0	4
合　　計	22	2	1	4	30	1	60



H……住　居　跡　　D……土　　壙

B……掘立柱建築跡　　W……溝　　跡

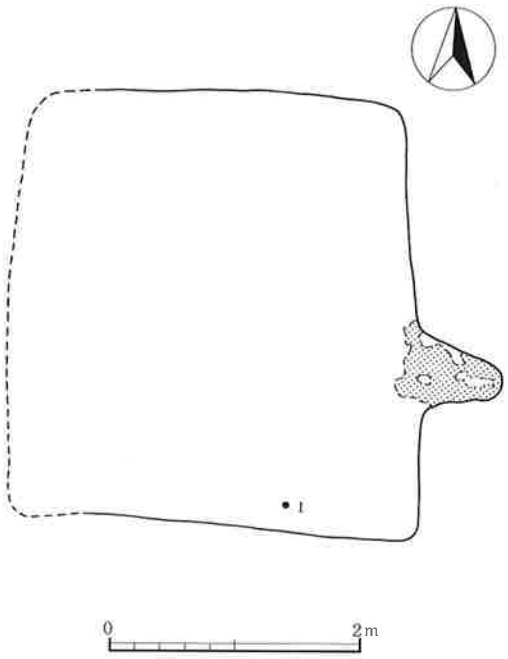
I……井　戸　跡

第4図　遺　構　全　体　図　(1/250)

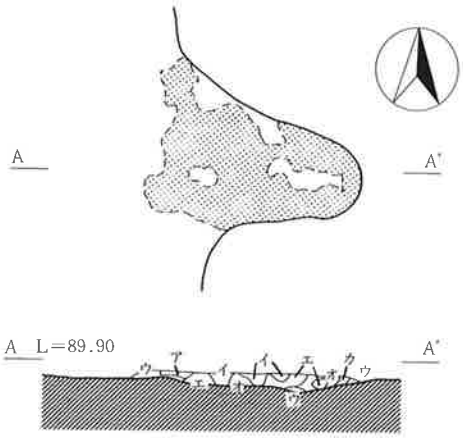
4. 遺構と遺物

(1) 住　居　跡

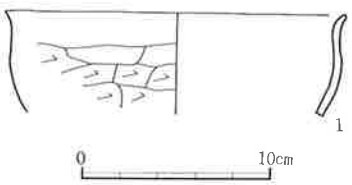
ⓐ　1号住居



第6図　1号住居実測図



第7図　1号住居カマド実測図



第8図　1号住居出土遺物

位置　調査地西端に位置する。

平面形・規模　東西の辺は不明だが、南北の辺が3.5mを測る隅丸長方形を呈する。主軸方向はN－91°－Eを示す。

周壁　西側の壁は認めることができなかったが、東側の壁については、褐色土層を掘り込んだ状態で、壁高わずか1～2cm程を測った。

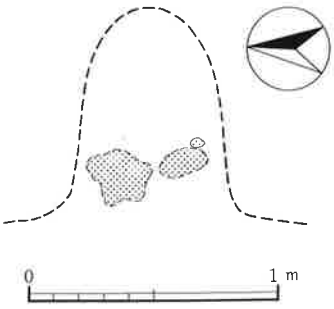
カマド　東壁やや南寄りに付設し、壁外で袖がない。覆土には焼土、炭化物を多量に含む。

遺物　カマド中央部から、土師質の鉢を検出した。

第2表　1号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図1 図版	土師器 鉢	口径17.5	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、 内面　ナデ	石英・雲母・ 小礫・輝石含 有	色調　褐色 焼成　良好 残度　10%

ⓑ　2号住居



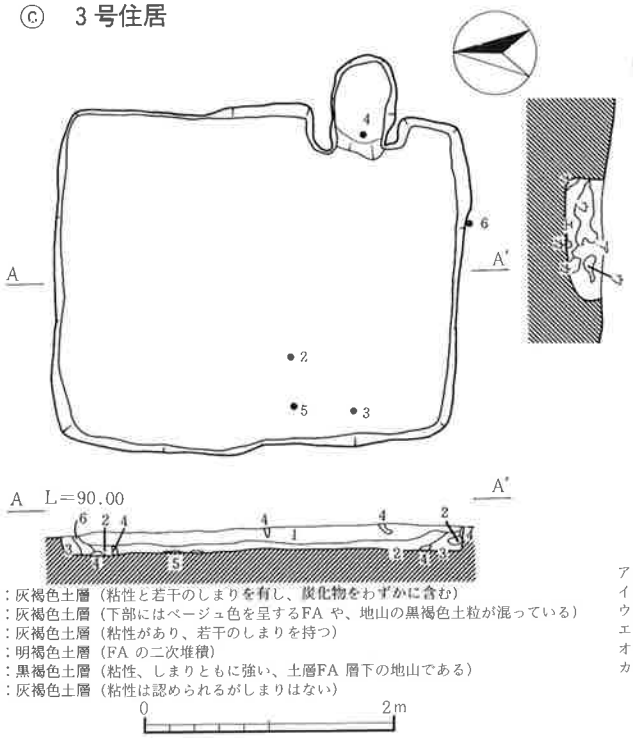
第9図　2号住居実測図

位置　調査地西端で、1号住居の東隣に位置する。

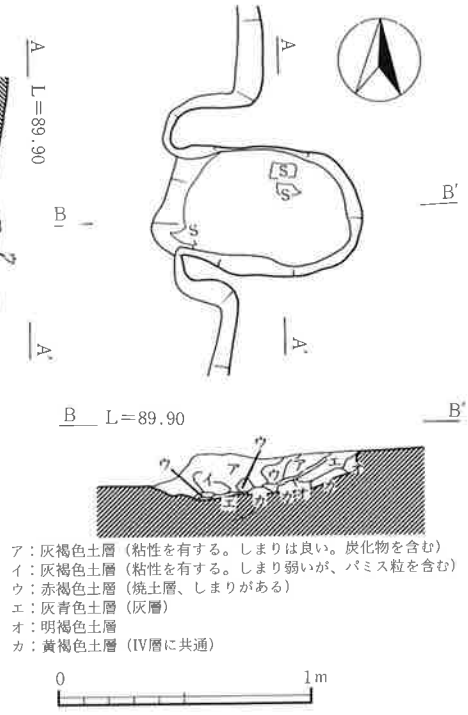
平面形・規模　遺構全面にわたり削平された状態で検出された。そのため、周壁、周溝、床面、貯蔵穴等確認できなかった。主軸方向はN－89°－Eを示すものと考えられる。

カマド　東壁付設で、壁外袖無しではないかと考えられる。火床部と思われる所は、5㎝程の高さを残すのみである。覆土中には、やや粘質をともなった炭化物、焼土ブロック、焼土粒の混土が含まれていた。

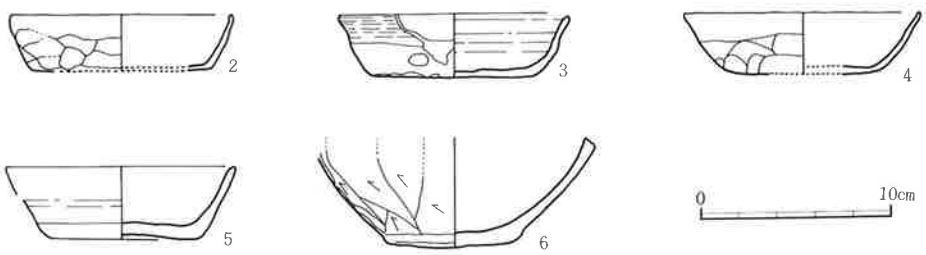
ⓒ　3号住居



第10図　3号住居実測図



第11図　3号住居カマド実測図



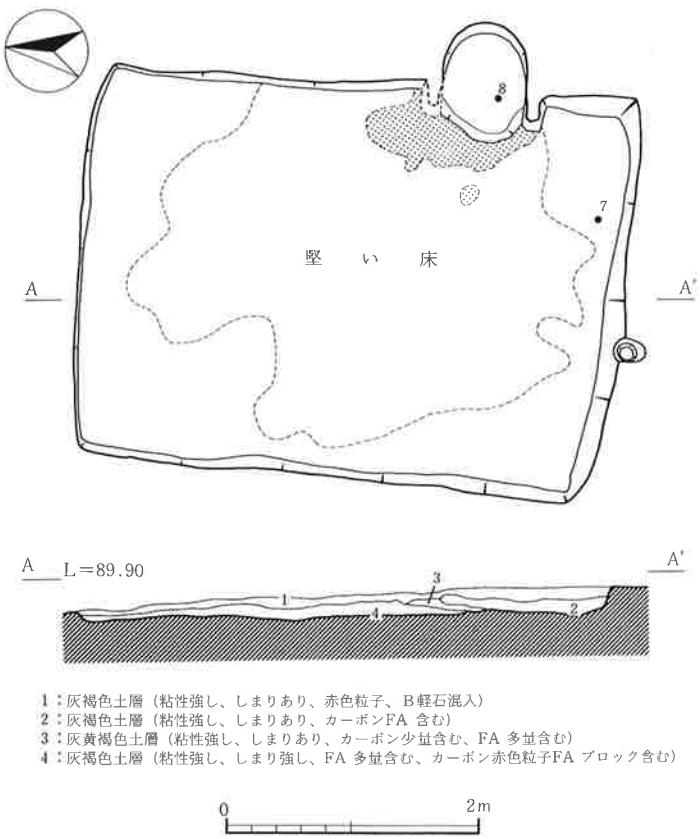
第12図　3号住居出土遺物

位置・平面形・規模　調査地西寄りに位置する。長辺3.2m、短辺2.6mの小規模の隅丸長方形を呈する。長軸方向はN―91°―Eを示す。周壁は北東部を除き、平均して壁高19cm前後である。

床面・カマド　起伏が少ない平坦な床面である。カマドは東壁南寄りに位置している。

第3表　3号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 2 図版	土師器 坏	口径11.9 底径 9.4 残高 3.0	口縁部　横ナデ、胴部　一部指圧痕 ヘラ削り、底部　ヘラ削り、内面　横ナデ	石英・雲母・小礫・輝石含有	色調　黒褐色 焼成　良好 残度　20%
挿図 3 図版	土師器 坏	口径12.3 底径 8.5 器高 3.4	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラナデ一部指圧痕有り、内面　横ナデ指圧痕有り	雲母・小礫・白色粒子・輝石含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　80%
挿図 4 図版	土師器 坏	口径12.5 底径 8.2 器高 3.3	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ、胴部　一部指圧痕有り	石英・雲母・輝石・小礫含有	色調　茶褐色 胴部　少量スス付着 焼成　良好　残度　30%
挿図 5 図版	須恵器 坏	口径12.0 底径 8.1 器高 3.9	回転ロクロ成形、底部　回転糸切り	石英・雲母・小礫含有	色調　灰色 焼成　良好 残度　50%
挿図 6 図版	土師器 甕	底径 7.0	胴部・底部・内面　ヘラ削り	石英・輝石・小礫含有	色調　赤褐色 焼成　良好　残度　20%



第13図　4号住居実測図

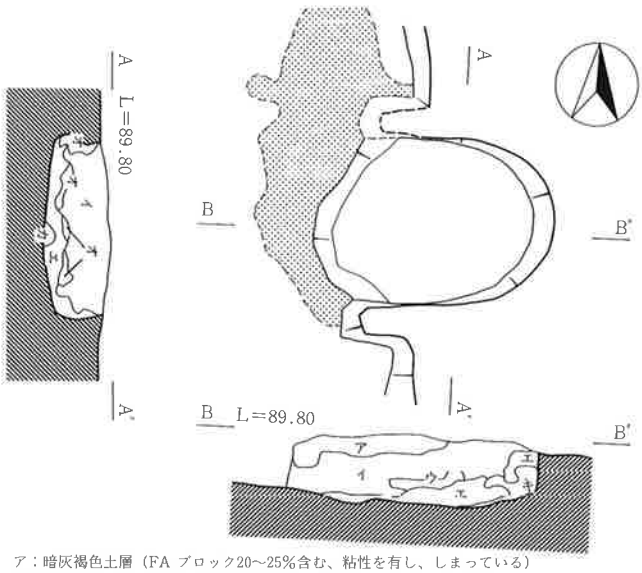
位置　調査地南東部に位置している。

平面形・規模　長辺4.3m、短辺3.3mを測り、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN―94°―Eを示す。

周壁　北部の壁高は5cm前後であるが、南部から南西部にかけては残存状態が良好で、24cmを測る。

床面　北高南低で高低差は3cm前後。平坦な床面である。周壁より約20～80cm幅で柔い面があり、その内側は堅い面となっている。カマド焚口中央部から北部にかけて、約20～40cm幅で灰の痕跡が確認された。

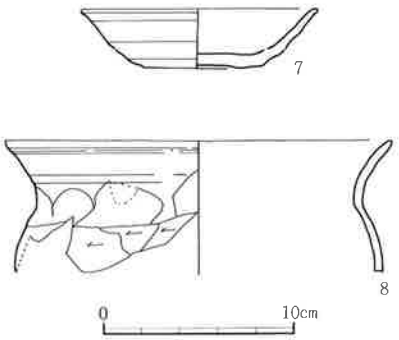
カマド　東壁中央部に付設され、壁外で、袖は南側のみ



第14図　４号住居カマド実測図

確認された。平面形は焚口幅約70cm、奥壁幅約65cm、奥行約90cmである。燃焼部中央は床面よりも約10cm低くなっている。

遺物　カマド燃焼部中央から土師質の台付甕、住居南東隅から須恵質の坏が出土している。



第15図　４号住居出土遺物

第４表　４号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 7 図版	須恵器 坏	口径12.5 底径 6.4 器高 3.0	回転ロクロ成形、底部　回転糸切り	雲母・石英・長石・小礫含有	色調　暗灰色 焼成　良好 残度　70%
挿図 8 図版	土師器 甕	口径20.0 残高 6.8	口縁部　横ナデ指圧痕、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ一部指圧痕有り	雲母・小礫・石英・輝石少量含有	色調　淡褐色 焼成　良好 残度　15%

ⓔ　**５号住居**

位置　調査地北西部に位置する。

平面形・規模　長辺4.2m、短辺3.2mを測り、形状は隅丸長方形である。主軸方向はＮ－91°－Ｅを示す。

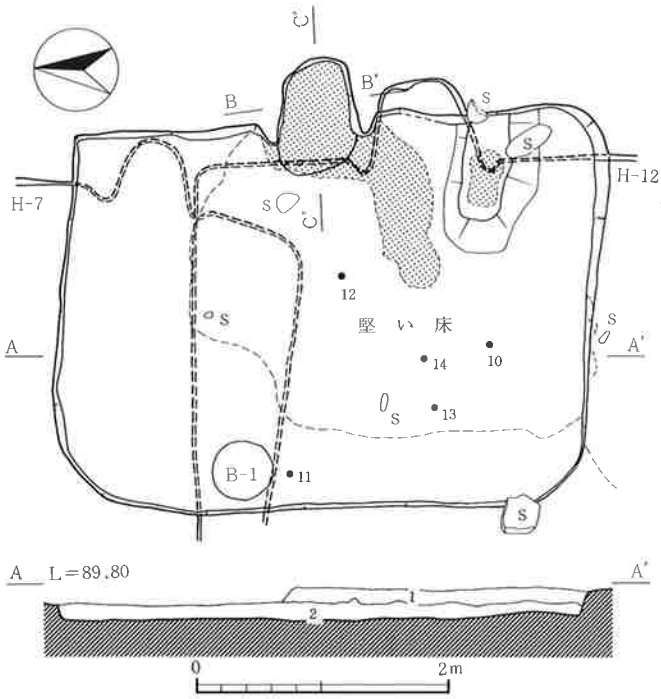
周壁　北壁、西壁は14cm前後残存しており良好だが、東壁は３cm前後残存しているだけである。

床面　南東隅を中心に半径3.2m内は堅い面でその外は柔い面となっている。カマド内と焚口南寄りから西側にかけて、焼土と炭化物の分布が認められた。

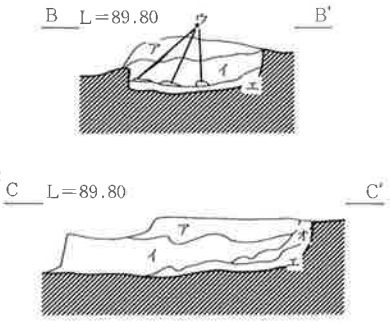
カマド　東壁中央に付設され、壁外で両袖を有す。燃焼部中央には多量の焼土、灰を含む。

遺物　中央部から南東隅にかけて、土師質の甕、須恵質の坏、鉢などが多量に出土した。

他の遺構　本住居は北側で７号住居と重複し、南側では12号住居と重複している。本住居との先後関係は、古い順に７号住居、12号住居、５号住居である。



第16図　5号住居実測図

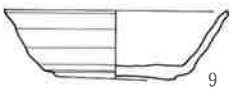


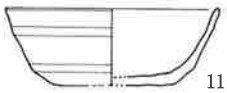
ア：灰褐色土層（シルト質粘土、粘性あり、しまっている）
イ：灰褐色土層（シルト質粘土、粘性あり、しまっている）
ウ：焼土層
エ：黒色土層（純灰層、粘性あり、しまり弱い）
オ：明褐色土層（焼土層、硬い焼土を50%以上含む）

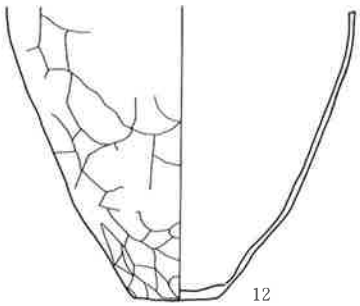
1：灰褐色土層（シルト質粘土、鉄分酸化土、マンガンブロックを含む、しまり有り）

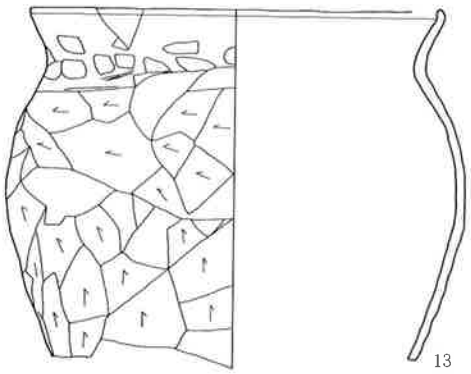
2：オリーブ褐色土層（シルト質粘土、鉄分酸化土、マンガンブロック含む、粘性、しまり有する）

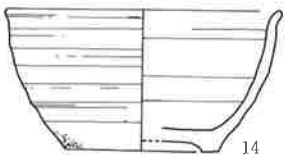
第17図　5号住居カマド断面実測図









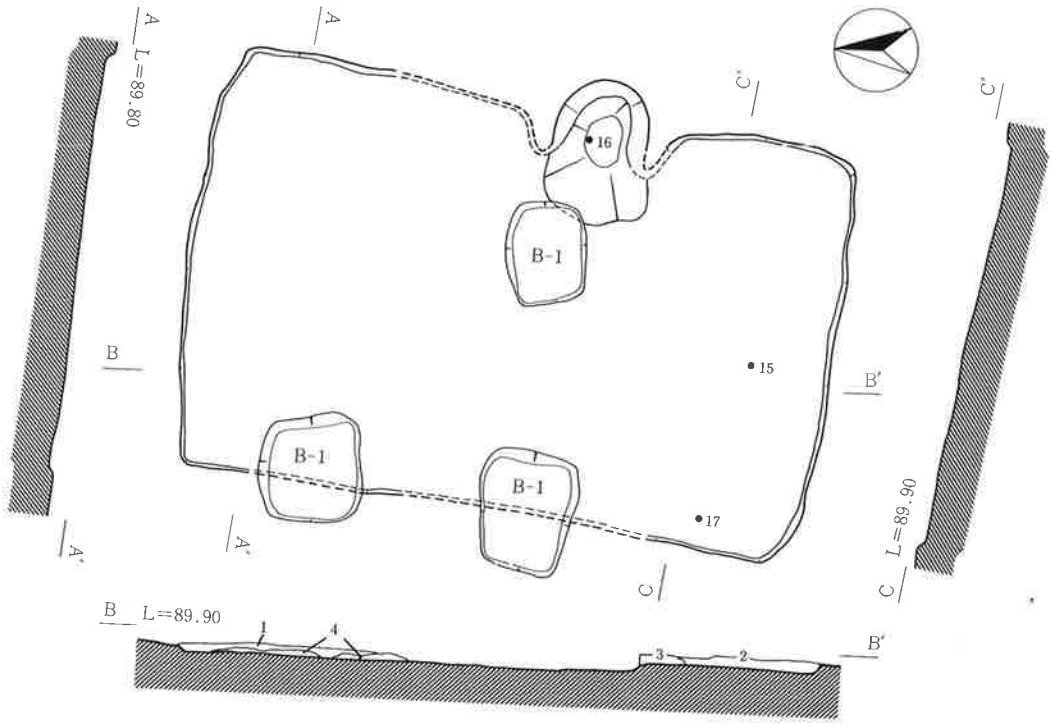


第18図　5号住居出土遺物

第5表　5号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 9 図版	須恵器 坏	口径11.9 底径 6.2 器高 3.5	回転ロクロ成形、底部　回転糸切り	雲母・長石・ 砂粒含有	色調　暗灰色 焼成　良好 完形
挿図 10 図版	須恵器 坏	口径10.8 底径 6.2 器高 3.8	口縁部・胴部・内面　回転ロクロ成形、底部　回転糸切り	雲母・長石・ 礫少量含有	色調　灰色 焼成　良好 残度　25%
挿図 11 図版	須恵器 坏	口径11.4 底径 6.4 器高 4.1	外面・内面　回転ロクロ成形、底部ヘラ調整	雲母・長石・ 礫少量含有	色調　灰色 焼成　良好 残度　30%
挿図 12 図版	土師器 甕	底径 4.4 残高15.5	胴部・底部　ヘラ削り、内面ナデ	石英・小礫含有	色調　褐色　ススト付着 焼成　良好　残度　30%
挿図 13 図版	土師器 甕	口径21.9 残高19.0	口縁部　横ナデ指圧痕、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ	石英・雲母・ 小礫・輝石少量含有	色調　淡褐色 焼成　良好　残度　60%
挿図 14 図版	須恵器 鉢	口径14.5 底径 8.2 器高 7.4	回転ロクロ成形	雲母・小礫・ 輝石少量含有	色調　灰色　焼成　良好 胴部・内面に酸化鉄少量付着　残度　50%

ⓑ　6号住居

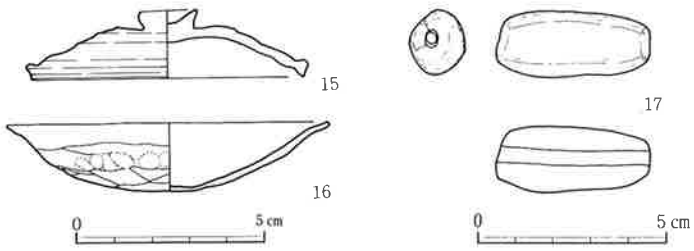


1：灰褐色土層（鉄分凝集の茶褐色粒30%含む、炭化物ブロック含む、粘性としまりがある）
2：灰褐色土層（鉄分凝集の茶褐色粒30%含む、炭化物ブロック含む、粘性があり、わずかにしまっている）
3：橙色土層（砂　焼土ブロック30%混入、粘性あり、しまりがある）
4：灰褐色土層（砂　鉄分凝集の茶褐色粒30%混入、黄褐色土がブロック（1～3cm）状に30%混入、しまりと粘性がある）

第19図　6号住居実測図

0　2 m

位置　調査地北西に位置し、3号住居北隣りである。



第20図　6号住居出土遺物

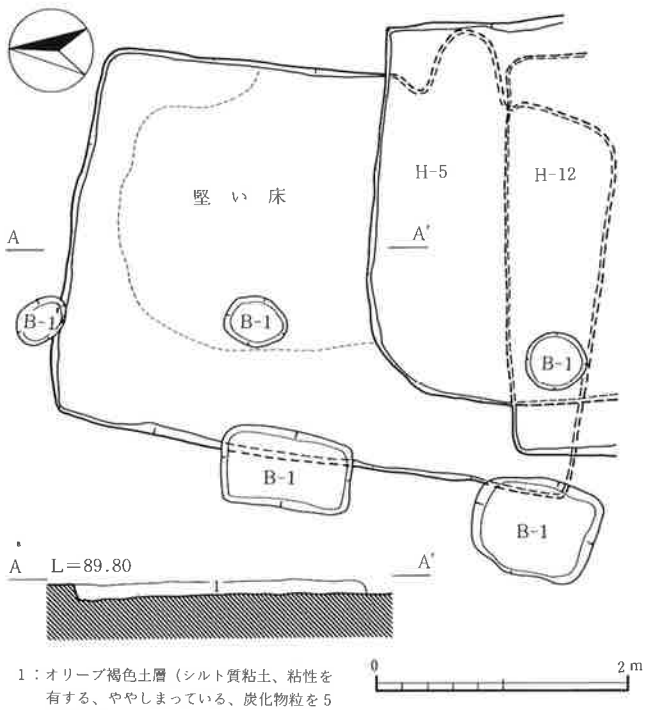
平面形・規模　長辺5.1m、短辺3.4mの隅丸長方形で、主軸方向はN—96°—Eである。

遺物　土錘が住居南西隅から4個出土する。漁業が営まれていたことが予想される。

第6表　6号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 15 図版	須恵器 蓋	口径14.2 器高 3.6	回転ロクロ成形後、つまみ（回転ロクロ成形）貼付	雲母・小礫含有	色調　灰色　焼成　良好 残度　70%
挿図 16 図版	土師器 坏	口径17.0 底径 4.0 器高 3.6	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り指圧痕、底部　ヘラ削り、内面　横ナデ	長石・石英・雲母・輝石含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　75%
挿図 17 図版	土錘	口径 4.5 高さ 1.6 横　4.2	ナデ成形一部指圧痕有り	石英・雲母・小礫・白色粒子含有	色調　褐色　4個出土 焼成　良好 完形

ⓖ　7号住居



1：オリーブ褐色土層（シルト質粘土、粘性を有する、ややしまっている、炭化物粒を5%含む）

第21図　7号住居実測図

位置　調査地北西に位置し、5号住居、12号住居、1号掘立柱建築と重複している。

平面形・規模　南側の部分が5号住居、12号住居により切られているため、南北の辺が不明瞭であるが、東西の辺が3.4mを測り、隅丸長丸形を呈する。主軸方向はN—97°—Eを示す。

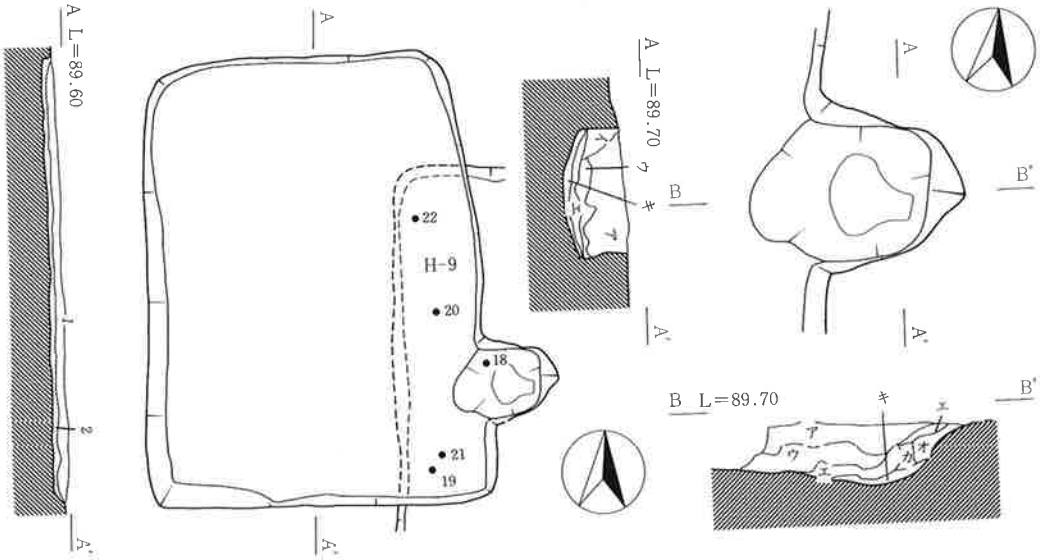
周壁　南壁、東壁の南半分は、不明であるが、それ以外の部分については壁高約10cmを確認した。

床面　北壁・西壁より約60～160cm幅で柔い面があり、その内側は堅い面となっている。起伏の少ない、平坦な床面である。

カマド　5号住居に切られており、不明である。

他の遺構　先後関係は、古い順に7号住居、12号住居、5号住居、1号掘立柱建築である。

ⓗ　8号住居

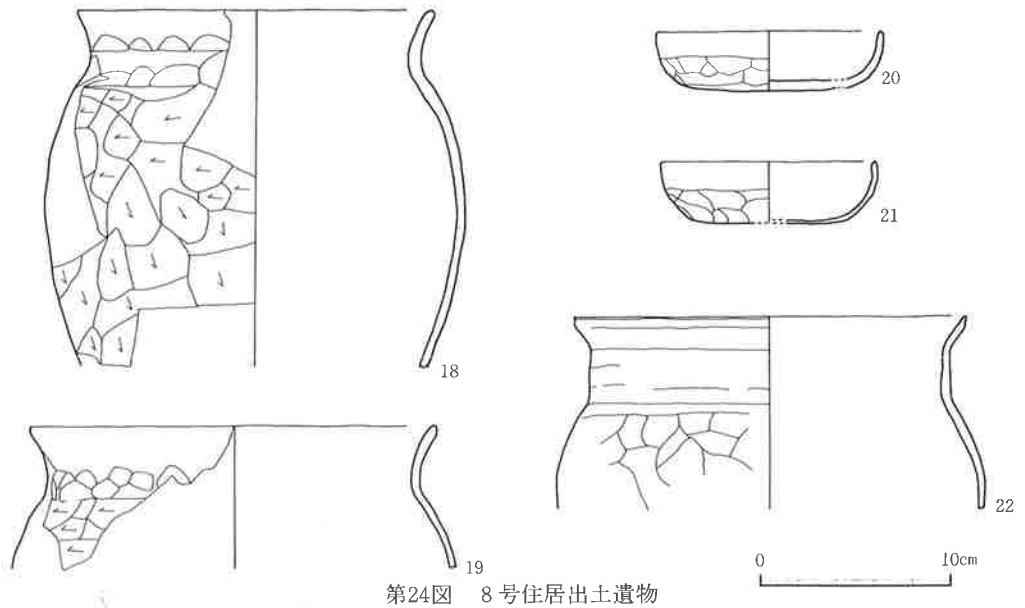


1：灰褐色土層（粘性しまりともにあり、FA ブロックを少量含む）
2：灰褐色土層（粘性しまりともにあり、粘質灰色土と FA、黒褐色土、暗褐色土の混土層）

第22図　8号住居実測図

ア：暗褐色土層（シルト質、粘性あり、しまりがある炭化物、赤色焼土粒少量混入）
イ：暗褐色土層（炭化物粒、焼土粒、混入）
ウ：黒色土層（炭化物層）
エ：レンガ色土層（焼土層下方の部分は硬くしまっている）
オ：暗褐色土層（H－9のフク土混入）
カ：暗褐色土層（ア層、エ層、キ層、の混土）
キ：黒褐色土層（炭化物層、褐色の灰と黄褐色土が混入）

第23図　8号住居カマド実測図



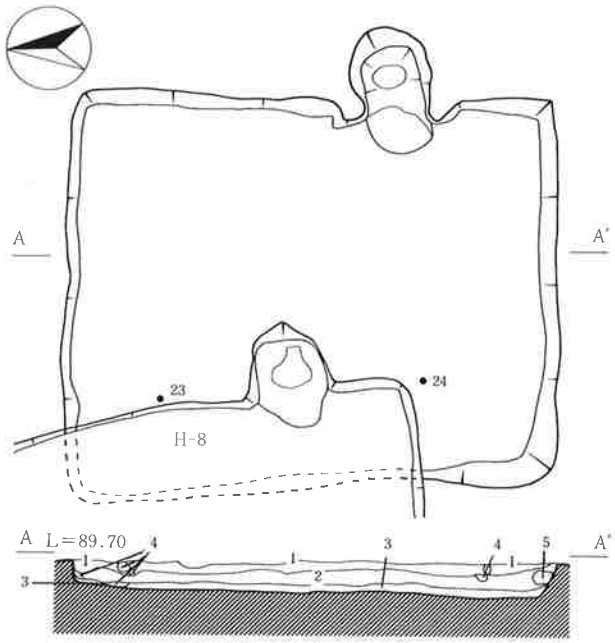
第24図　8号住居出土遺物

位置　調査地南西に位置し、9号住居と重複する。　**平面形・規模**　長辺3.6m、短辺2.7mの隅丸長方形である。主軸方向はN－86°－Eを示す。　**カマド**　東壁南寄りに付設。壁外袖無し。

第７表　８号住居　土 器 観 察 表

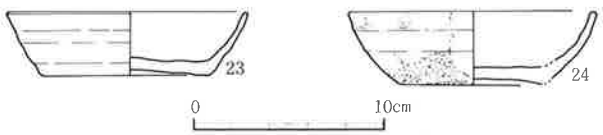
遺物番号	器　種	法量(cm)	技　　法　　等	胎　　土	備　　考
挿図 18 図版	土 師 器 甕	口径18.6 残高18.5	口縁部　横ナデ指圧痕、胴部　ヘラ削り一部指圧痕有り、内面　横ナデ	石英・雲母・小礫・輝石少量含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　15% 口縁部にゆがみ有り
挿図 19 図版	土 師 器 甕	口径21.2 残高 7.4	口縁部、横ナデ指圧痕、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ一部指圧痕有り	石英・雲母・輝石含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　10%
挿図 20 図版	土 師 器 坏	口径12.1 底径 8.2 器高 3.5	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り指圧痕、内面　横ナデ指圧痕有り	石英・小礫・輝石少量含有	色調　淡褐色 焼成　良好 残度　50%
挿図 21 図版	土 師 器 坏	口径11.5 底径 8.0 残高 3.3	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ指圧痕	石英・雲母・砂粒・輝石含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　30%
挿図 22 図版	土 師 器 甕	口径20.3 残高10.0	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ	石英・小礫・輝石少量含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　10% 外面・内面にスス付着

ⓘ　９号住居



1：灰褐色土層（粘性としまりを有する、FA 軽石を10%含む）
2：灰褐色土層（１層より若干粘性が強いが、FA 量は５%程度、他は同質）
3：灰褐色土層（２層と比較して、しまりが強い、焼土粒を若干含む）
4：黄褐色土層（FA 土、シルト状を呈して粘性がある、ブロックとして存在）
5：灰褐色土層（粘性、しまり、ともに強い、FA 粒含む）

第25図　９号住居実測図



第26図　９号住居出土遺物

位置　調査地南西に位置し、８号住居と重複する。

平面形・規模　長辺3.9m、短辺3.1mで、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN－91°－Eを示す。

周壁　北西部は８号住居により切られ不明だが、それ以外については、平均して壁高が約14.8cmあり良好である。

床面　起伏が少なく平坦な面であるが、南側に約２°の傾斜が認められた。

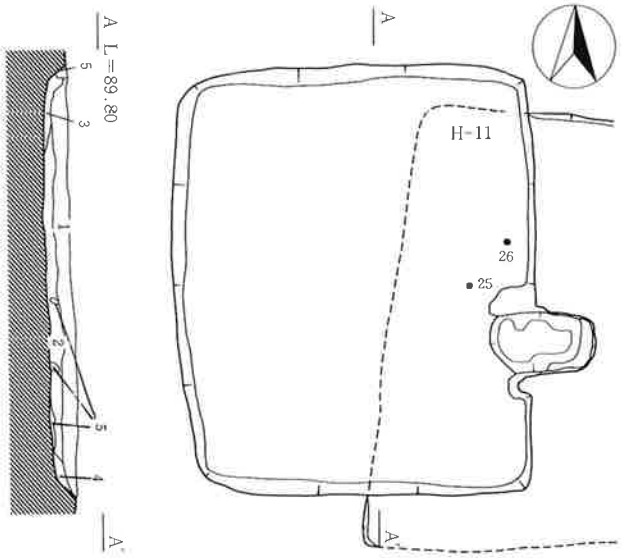
カマド　東壁やや南寄りに付設し壁外で、やや両袖を有す。平面形は、焚口幅約50cm、奥壁中央部幅約65cm、奥行約80cm程の半楕円形状を呈する。燃焼部覆土中には焼土・灰を含む。

遺物　住居北西隅から残度85%程の須恵質の坏、南西部からは残度60%程の須恵質の坏が出土した。２土器とも、回転ロクロ成形である。

第8表　9号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 23 図版	須恵器 坏	口径12.5 底径 8.6 器高 3.3	回転ロクロ成形、底部回転糸切り未調整	雲母・長石・小礫含有	色調　暗灰色 焼成　良好 残度　85% 口縁部から胴部・底部に自然釉付着
挿図 24 図版	須恵質 坏	口径13.2 底径 7.6 器高 3.8	回転ロクロ成形後、ナデ調整	石英・長石・輝石少量・礫多量含有	色調　茶灰色 焼成　良好 残度　60% 内面に酸化鉄多量付着

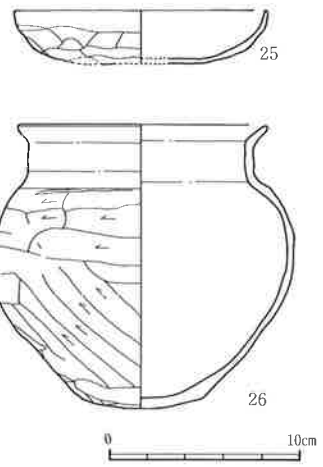
ⓙ　10号住居



1：灰褐色土層（粘性としまりを持つ、FA を５%含む）
2：灰褐色土層（１層より粘性に富み、FA ブロックと灰化物を含む）
3：灰褐色土層（粘性に富む、灰黄褐色土が30%含まれる）
4：灰褐色土層（粘性に富む）
5：黄褐色土層（FA 層、微粒シルト質で粘性あり）

0　2m

第27図　10号住居実測図



第28図　10号住居出土遺物

位置　調査地南西に位置し、11号住居と重複する。

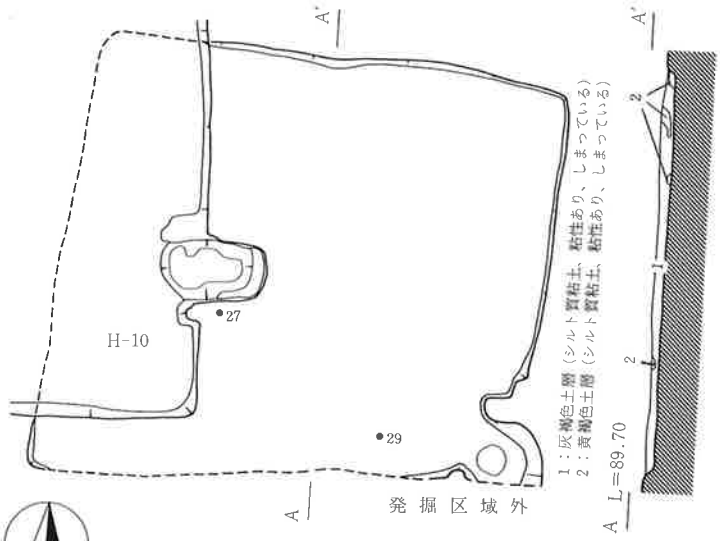
平面形・規模　長辺3.4m、短辺2.8mのやや小規模な隅丸長方形である。主軸方向はＮ－87°－Ｅを示す。

カマド　東壁やや南寄りで壁外に付設する。両袖を有するが、北側の袖がやや南側にくらべ幅が広くて長い。平面形は焚口幅約50cm、奥壁中央部幅約47cm、奥行約80cm程の半楕円形を呈する。燃焼部覆土中には、多量の焼土が確認された。

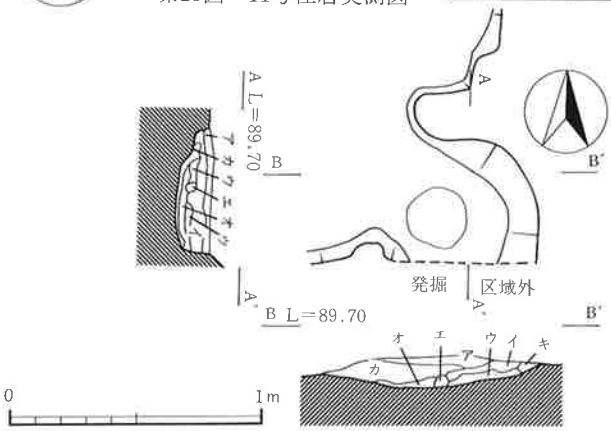
第9表　10号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 25 図版	土師器 坏	口径13.4 底径 6.0 残高 2.9	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り一部指圧痕、内面　横ナデ指圧痕有り	石英・雲母・砂粒・小礫・輝石含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　60%
挿図 26 図版	土師器 甕	口径13.2 底径 6.3 器高15.1	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面ナデ	石英・小礫含有	色調　赤褐色 ススト付着 焼成　良好 残度　95%

ⓚ 11号住居

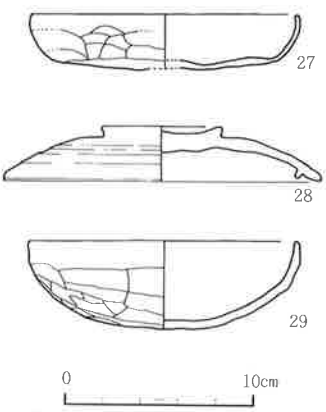


第29図　11号住居実測図



ア：暗灰褐色土層（シルト状を呈し、粘性がある焼土粒、灰を5％含む）
イ：灰黄褐色土層（シルト状を呈し、軟質で粘性を有する、焼土粒を5％含む）
ウ：榿褐色土層（粘性あるが脆い、80％の焼土粒を含む）
エ：橙色土層（焼土ブロックで、硬くしまっている）
オ：灰色土層（灰に焼土粒5％含む）
カ：暗褐色土層（灰層）
キ：橙褐色土層（粘性を有する、軟質焼土を80％含む）

第30図　11号住居カマド実測図



第31図　11号住居出土遺物

位置　調査地南西に位置し、遺構の一部が調査区域外である。10号住居と重複している。

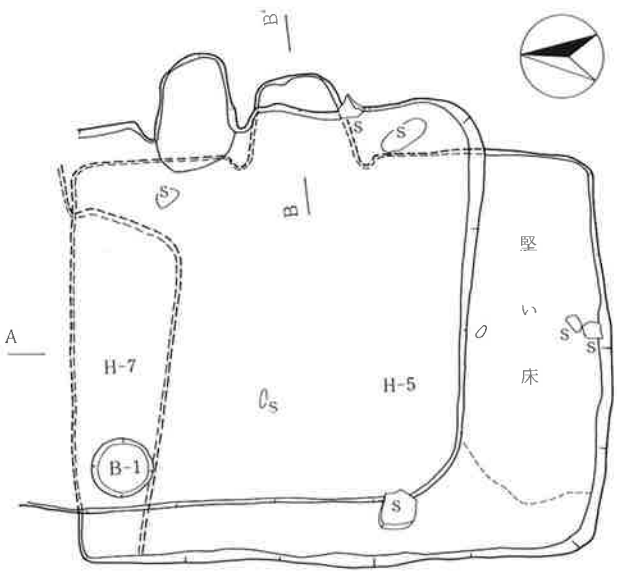
平面形・規模　10号住居に切られ、一部が調査区域外のため不明瞭であるが、長辺3.7m、短辺3.6mの長方形を呈すと思われる。主軸方向はN—94°—Eを示す。

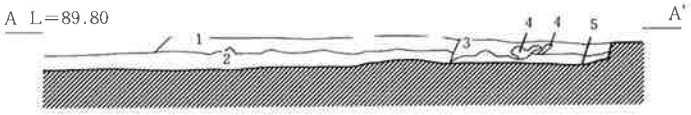
周壁　壁高は平均して5.5cm程で残度状態はよくない。

第10表　11号住居　土器観察表

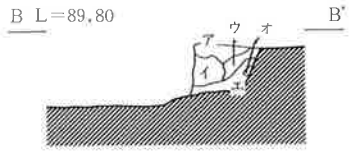
遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図27 図版	土師器 坏	口径14.4 底径12.0 器高 3.0	口縁部　横ナデ、胴部　一部指圧痕、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ指圧痕有り	石英・雲母・小礫・輝石含有	色調　淡褐色 焼成　良好 残度　45％ 底部少量スス付着
挿図28 図版	須恵器 蓋	口径16.8 底径 6.4 残高 2.9	回転ロクロ成形後、つまみ貼付調整	長石・雲母・石英・礫含有	色調　暗灰色 焼成　良好 残度　45％
挿図29 図版	土師器 坏	口径14.2 底径 6.0 器高 4.7	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面ナデ	雲母・長石・石英・輝石含有	色調　茶褐色 焼成　良好　残度　75％

① 12号住居





第32図　12号住居実測図

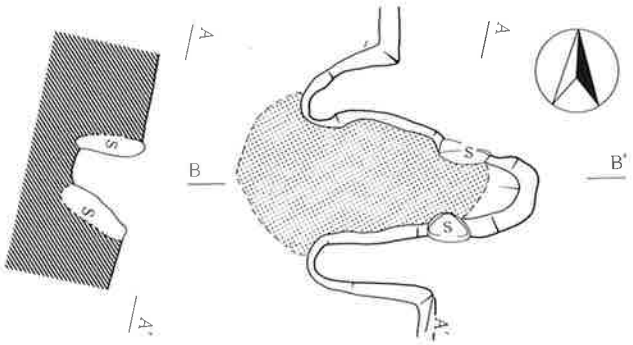


ア：褐色土層（粘性に富み、硬くしまりがある、FA の二次堆積）
イ：褐色土層（粘性に富み硬くしまりがある、焼土ブロック含む）
ウ：明褐色土層（粘性に富む、焼土含む）
エ：灰褐色土層（純灰色ラミナ状呈す、粘性がある、しまり弱い）
オ：灰黄褐色土層（粘性があり、焼土粒を含む）

1：灰褐色土層（鉄分酸化土、マンガン塊を含む、粘性しまりがあり）
2：オリーブ褐色土層（鉄分酸化土、マンガン塊を含む、粘性でしまりがある）
3：灰褐色土層（鉄分酸化土、マンガン塊を含む）
4：灰黒色土層（灰層、焼土も含む）
5：オリーブ褐色土層（粘性でしまりがある）

第33図　12号住居カマド断面実測図

ⓜ 13号住居



ア：茶褐色土層（粘質でしまりがある、黄褐色土ブロック含む）
イ：茶褐色土層（炭化物、焼土粒を含む）
ウ：黒灰色土層（炭化物、灰、焼土含む）
エ：黄褐色土層（焼土含む）

第34図　13号住居カマド実測図

位置　12号住居は中央部西寄りに位置し、5・7号住居と重複。

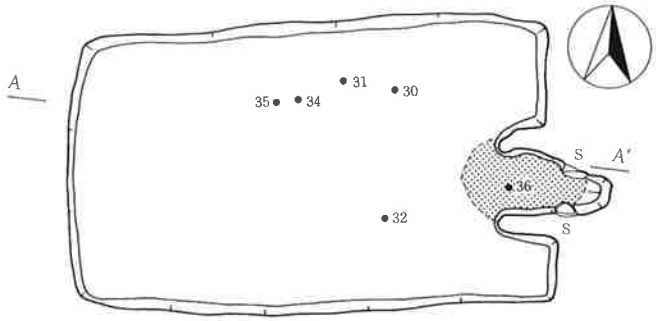
平面形・規模　長辺4.1m、短辺3.2mの隅丸長方形である。主軸方向はN—90°—Eを示す。

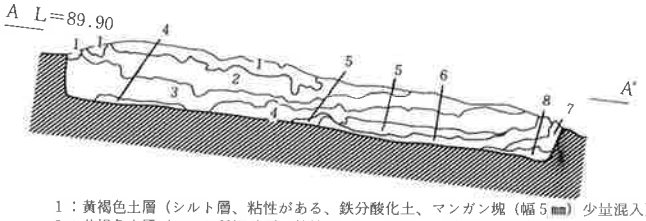
床面　南壁付近は堅い床である。

位置　13号住居は中央部南寄りに位置する。

平面形・規模　長辺3.8m、短辺2.2mの隅丸長方形である。主軸方向はN—85°—Eを示す。

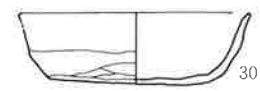
カマド　奥壁の両脇に石を使用。袖の構築材料にはFAを用いている。

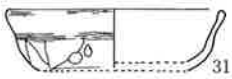


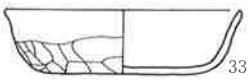


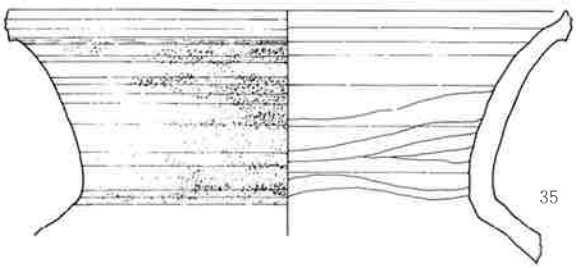
1：黄褐色土層（シルト層、粘性がある、鉄分酸化土、マンガン塊（幅5㎜）少量混入）
2：黄褐色土層（シルト質細砂層、粘性でしまりがある、礫及び石器多量に混入、焼土粒及び炭化物粒（幅8㎜）少量混入、土器片混入、B軽石混入）
3：黄褐色土層（シルト質細砂層、粘性でしまりがある、炭化物少量混入、土器片混入）
4：黄褐色土層（シルト層細砂層、粘性でしまりがある、焼土粒及び炭化物粒少量混入）
5：黄褐色土層（シルト層細砂層、粘性でしまりがある）
6：暗灰黄色土層（シルト層、粘性でしまりがある、 焼土灰混入）
7：暗灰黄色土層（灰が多量に混入）
8：黒褐色土層（シルト質、灰層、焼土が少量混入）

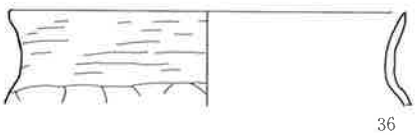
第35図　13号住居実測図









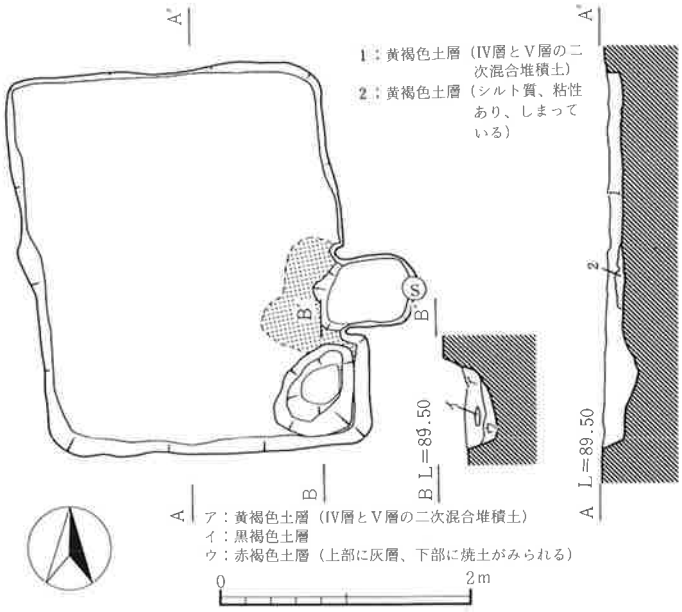


第36図　13号住居出土遺物

第11表　13号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図30 図版	土師器 坏	口径11.3 底径 9.0 器高 3.8	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ暗紋有り	長石・石英・砂粒を少量含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　50%
挿図31 図版	土師器 坏	口径11.6 底径 8.0 残高 3.2	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ、胴部沈線有り	雲母・小礫・輝石少量含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　25% 口縁部ゆがみ有り
挿図32 図版	須恵器 坏	口径12.0 底径 5.6 器高 3.8	回転ロクロ成形、底部　回転糸切未調整	石英・雲母・小礫含有	色調　青灰色 底部の外面・内面赤味を帯びる 焼成　良好 残度　80%
挿図33 図版	土師器 坏	口径12.6 底径 8.6 器高 3.5	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ指圧痕有り	小礫・長石・輝石含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　90% 口縁部ゆがみ有り
挿図34 図版	須恵器 蓋	口径14.0 底径 4.6 器高 2.8	回転ロクロ成形後、つまみ貼付調整	長石・雲母・礫含有	色調　暗灰色 焼成　良好 残度　50%
挿図35 図版	須恵器 甕	口径30.0 残高13.5	口縁部・内面　回転ロクロ成形	小礫・長石少量含有	色調　青灰色 焼成　良好 残度　20%
挿図36 図版	土師器 甕	口径21.0 残高 5.0	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面　ナデ	石英・小礫・輝石少量含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　10%
挿図37 図版	須恵器 甕	口径30.0 残高20.0	回転ロクロ成形	雲母・石英・長石・小礫含有	色調　灰色 焼成　良好 残度　5%

ⓝ　14号住居



第37図　14号住居実測図

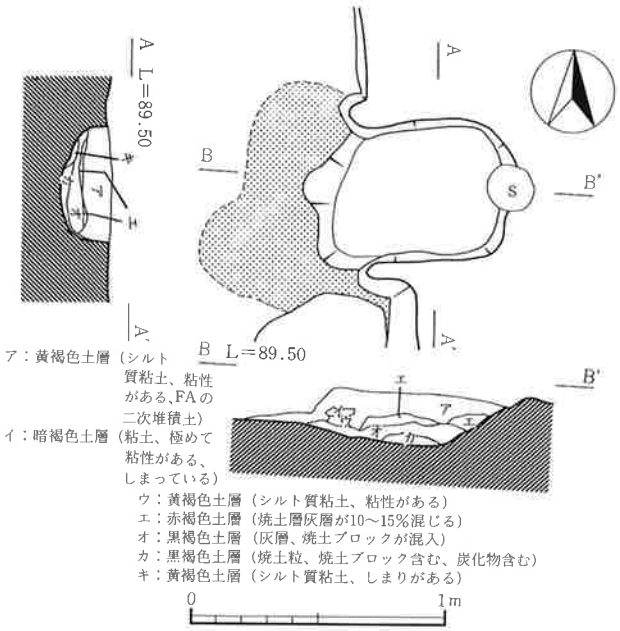
位置　調査地北東に位置している。

平面形・規模　長辺3m、短辺2.6mで、隅丸長方形を呈する。主軸方向はN－86°－Eを示す。

周壁　残存状態は、比較的良好で、褐色土層を掘り込んだ状態で壁高約9～19cmを測る。

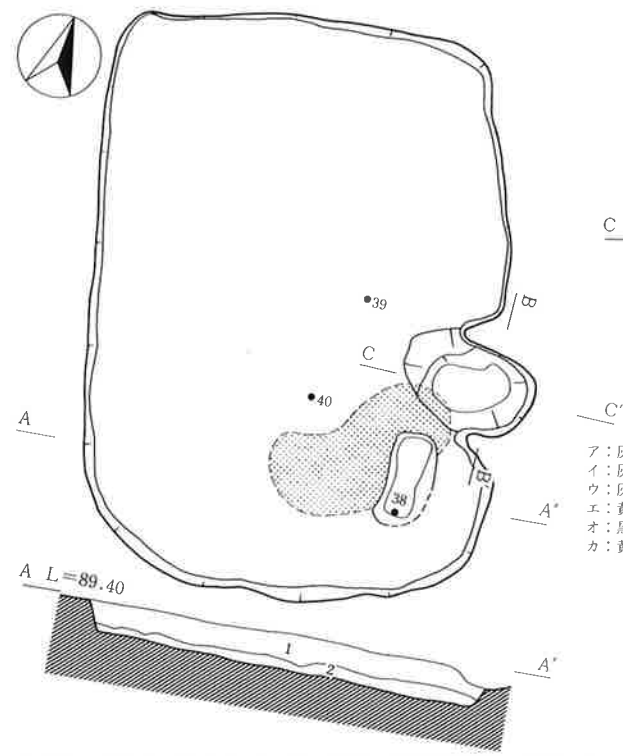
床面　中央部から北部にかけては、起伏の少ない平坦な面であるが、南側で約13cm程の落ち込みがみられた。またカマド焚口西寄りに、約22～45cm程の幅で焼土と炭化物の分布が確認された。

カマド　住居東壁やや南寄り、壁外に付設されている。両袖とも有するが小規模な袖である。平面形は、焚口幅約60cm、奥壁幅約55cm、奥行約80cmの半楕円形を呈している。燃焼部中央は、



第38図　14号住居カマド実測図

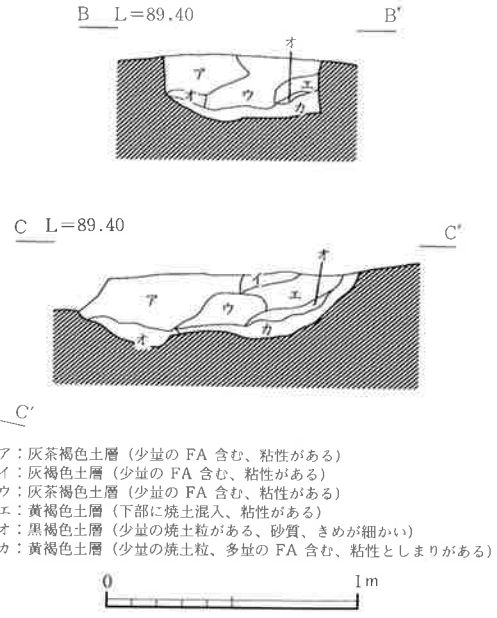
◎　15号住居



第39図　15号住居実測図

床面よりも約15cm低くなっている。覆土には、上部に FA の二次堆積土、シルト質粘土、下部に灰、焼土、炭化物などを含んでいることが確認された。両袖は FA を含む粘土で構築。また煙道部には川原石の使用がみとめられた。

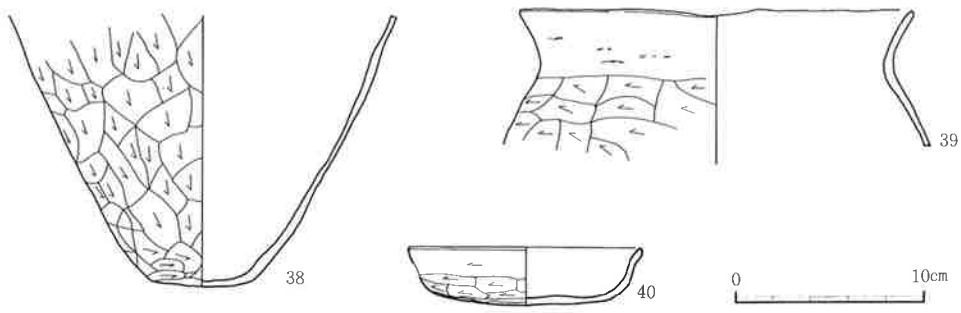
貯蔵穴　南東の隅に位置し、カマドに隣接する。規模は長直径約80cm、短直径約60cmで、深さは約30cmを測る。平面形は楕円形を呈する。覆土には、上部に FA を混入する黄褐色土と褐色土の二次混合堆積土、下部に灰、焼土を含んでいることが確認された。



第40図　15号住居カマド断面実測図

位置　調査地北東隅に位置する。

平面形・規模　長辺4.5m、短辺３mの隅丸長方形を呈する。辺の中央部がやや膨らむ傾向を示す。方向はN－76°－Eである。

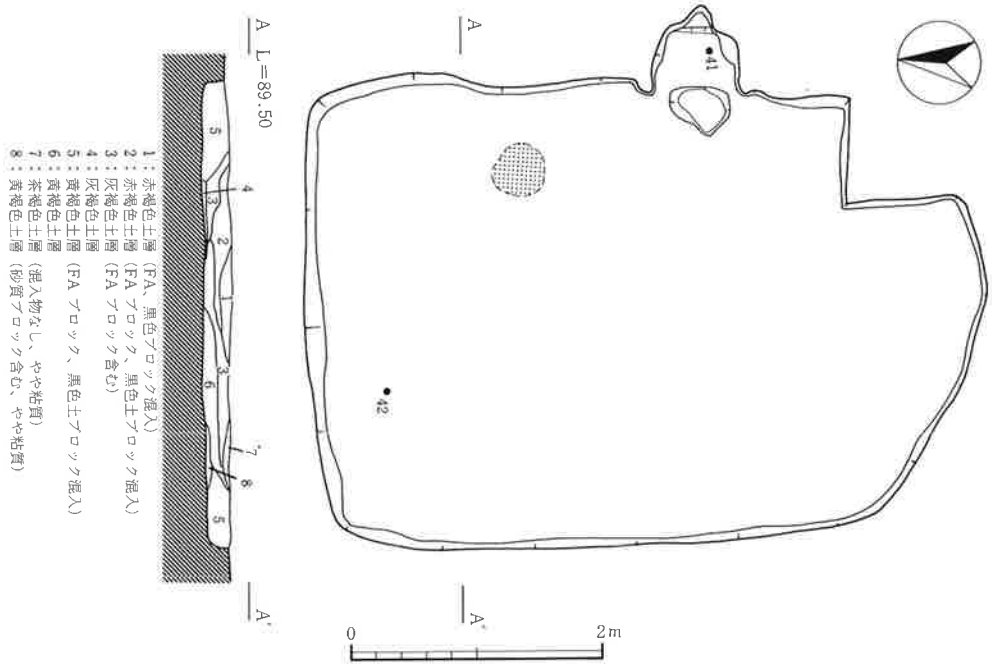


第41図　15号住居出土遺物

第12表　15号住居　土 器 観 察 表

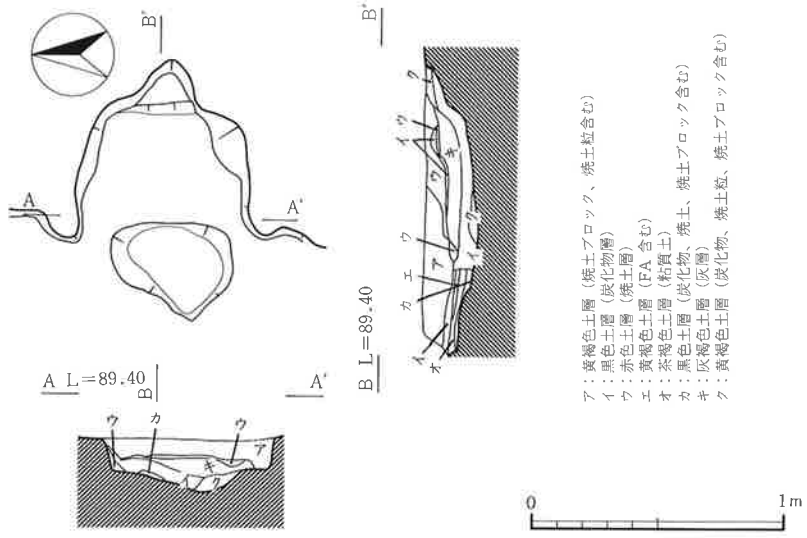
遺物番号	器　種	法量(cm)	技　　法　　等	胎　　土	備　　考
挿図 38 図版	土 師 器 甕	底径 5.2 残高14.3	胴部・底部　ヘラ削り、内面　ナデ	小礫・輝石・ 石英含有	色調　黒褐色 焼成　良好 残度　35%
挿図 39 図版	土 師 器 甕	口径20.4 残高 7.0	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、 内面　ナデ	石英・雲母・ 小礫・輝石含 有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　5 % 口縁部にゆがみ有り ス ス付着
挿図 40 図版	土 師 器 坏	口径12.3 底径 8.0 器高 3.0	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ 削り一部指圧痕有り、内面　横ナデ 一部指圧痕有り	雲母・輝石・ 小礫含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　85%

ⓟ　16号住居

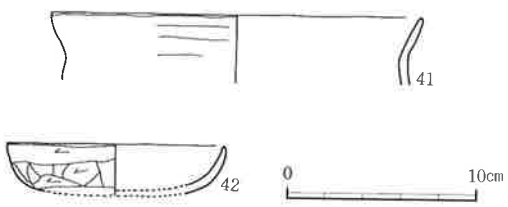


第42図　16号住居実測図

位置　調査地北東に位置し、15号住居南隣りである。



第43図　16号住居カマド実測図

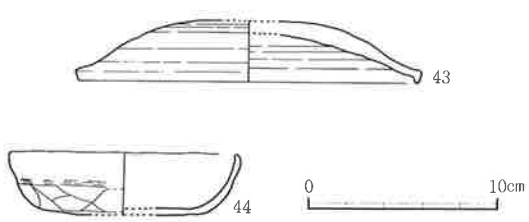


第44図　16号住居出土遺物

第13表　16号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 41 図版	土師器 甕	口径19.3 残高 3.5	口縁部　横ナデ	雲母・輝石・ 小礫含有	色調　赤褐色　ス付着 焼成　良好　残度　3％
挿図 42 図版	土師器 坏	口径11.6 底径 7.4 残高 2.8	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、 内面　ナデ	石英・小礫含 有	色調　暗褐色 焼成　良好　残度　15％ 外面・内面にス付着

⑨　17号住居

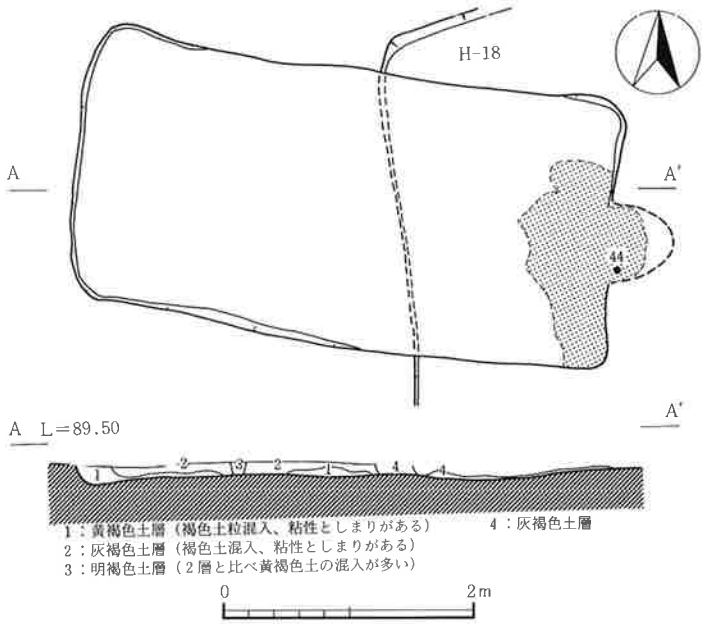


第45図　17号住居出土遺物

位置　調査地東側に位置し、18号住居と重複する。

平面形・規模　長辺4.3m、短辺2.2mを測り、形状は隅丸長方形である。長辺と短辺の比が約1.95で、住居22軒中最も大きい。主軸方向はN－96°－Eを示す。

周壁　西壁から南壁にかけては、壁高の残存状態が比較的よく約10cmである。



第46図　17号住居実測図

床面　約4～6cmの高低の差がある起伏のある床面である。西壁東隣りの部分にやや落ち込みがみられる。

カマド　削平がひどく、確認することができなかった。焼土、炭化物の分布が、カマド内とカマド西寄りにみとめることができた。

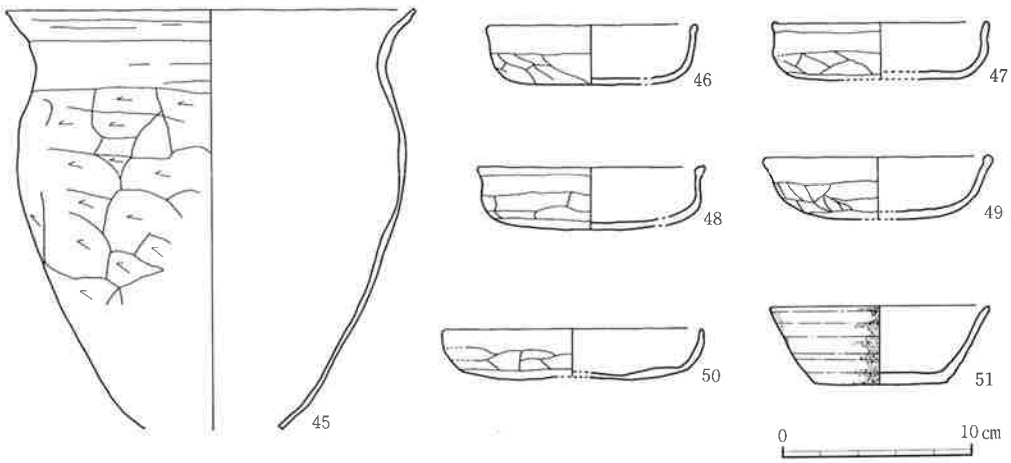
遺物　カマド内から土師質の坏が出土。その外からも須恵質の蓋が出土している。

他の遺構　18号住居との先後関係は本住居が後である。

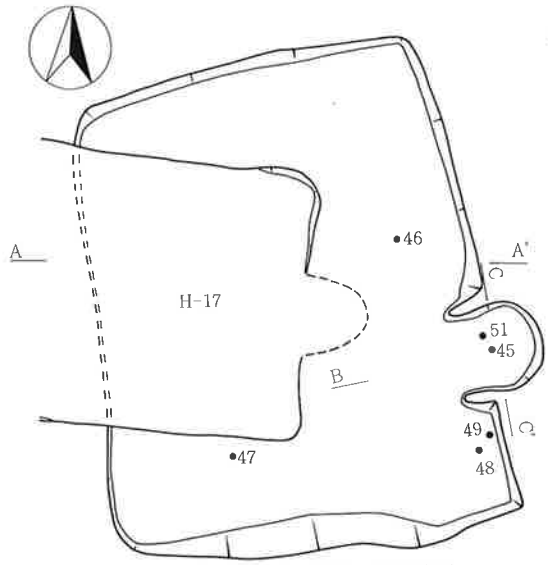
第14表　17号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 43 図版	須恵器 蓋	口径17.4 残高 3.2	口縁部・胴部・内面　回転ロクロ成形	石英・雲母・小礫少量含有	色調　灰色　焼成　良好 残度　30%
挿図 44 図版	土師器 坏	口径12.2 底径 9.0 器高 3.3	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、胴部にうすい沈線有り、内面横ナデ指圧痕有り	石英・雲母・小礫・輝石少量含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　25%

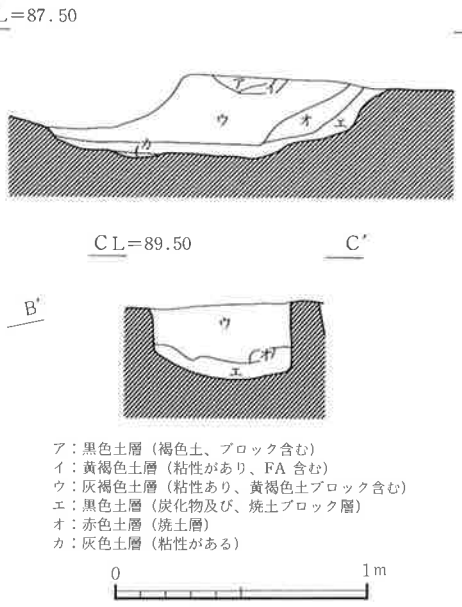
⑰　18号住居



第47図　18号住居出土遺物



第48図　18号住居実測図



第49図　18号住居カマド断面実測図

位置　調査地東側に位置し、17号住居と住居西側部分と重複する。

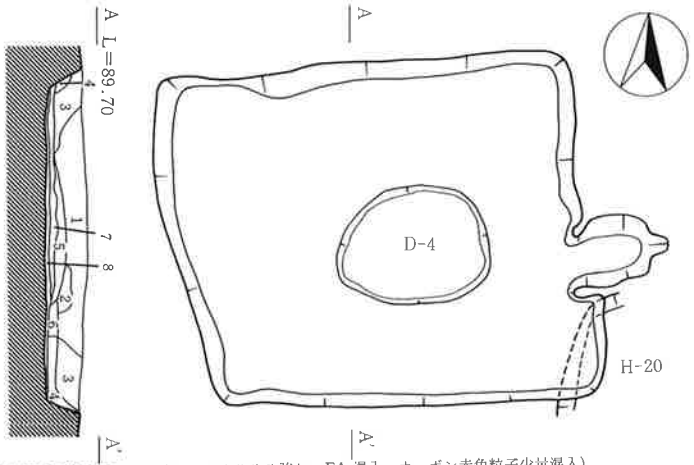
平面形・規模　長辺3.9m、短辺3.2mを測り、形状は長方形である。主軸方向はN―80°―Eを示す。やや南の短辺が曲線である。

遺物　土師質や須恵質の土器がカマド内、カマド付近からたくさん出土した。

第15表　18号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 45 図版	土師器 甕	口径21.2 残高21.7	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面　ナデ	輝石・雲母・小礫含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　60%
挿図 46 図版	土師器 坏	口径11.2 底径 8.2 器高 3.1	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り一部指圧痕、内面　横ナデ一部指圧痕有り	石英・小礫・雲母・長石・輝石含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　45%
挿図 47 図版	土師器 坏	口径11.4 底径 9.0 器高 3.0	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ一部指圧痕有り	石英・雲母・小礫・輝石少量含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　25%
挿図 48 図版	土師器 坏	口径12.0 底径 8.0 器高 3.3	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り指圧痕、内面　横ナデ指圧痕	石英・雲母・礫・長石・輝石含有	色調　明褐色 焼成　良好 残度　80%
挿図 49 図版	土師器 坏	口径12.0 底径 8.2 器高 3.3	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ一部指圧痕有り	石英・雲母・小礫・輝石少量含有	色調　明褐色 焼成 良好 残度　30% 口縁部ゆがみ有り
挿図 50 図版	土師器 坏	口径13.8 底径12.0 器高 2.7	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラナデ、底部　ヘラ削り、内面　横ナデ	石英・雲母・小礫・輝石含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　30%
挿図 51 図版	須恵器 坏	口径11.6 底径 7.0 器高 4.3	口縁部・胴部・内面　回転ロクロ成形、底部　回転糸切り	雲母・長石含有	色調　暗灰色 焼成　良好 残度　60%

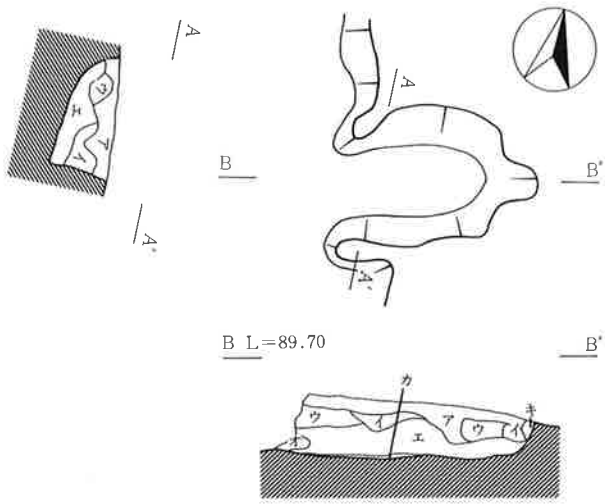
Ⓢ 19号住居



1：灰橙褐色土層（粘性強し、しまりやや強し、FA 混入、カーボン赤色粒子少址混入）
2：灰橙褐色土層（粘性強し、しまりあり、FA ブロック状に混入、白色粒子、カーボン少址混入）
3：灰褐色土層（粘性強し、しまりあり、FA 混入、カーボン混入）
4：灰橙褐色土層（粘性強し、しまりやや弱し、FA ブロック状に混入、赤色粒子、カーボン混入）
5：灰橙褐色土層（粘性強し、しまり強し、FA 混入、純パミス、カーボン混入）
6：灰褐色土層（粘性強し、しまり強し、FA 少址混入、白色パミス、赤色粒子混入）
7：灰褐色土層（粘性強し、しまりあり、FA 少址混入、カーボン、赤色粒子混入）
8：灰褐色土層（粘性強し、しまり強し、FA ブロック混入、カーボン、白色パミス少址混入）

0 2m

第50図　19号住居実測図



ア：灰黄褐色土層（粘性強し、しまりあり、カーボン少址混入、FA ブロック混入、砂粒と白色パミス混入）
イ：灰暗褐色土層（粘性強し、しまりあり、カーボン混入、FA 粒子少址混入、白色パミス混入）
ウ：灰褐色土層（粘性強し、しまり弱く、カーボン少址混入、FA 粒子少址混入、赤色粒子混入）
エ：灰黄褐色土層（粘性強し、しまりあり、カーボン混入、FA 粒子混入、白色パミス混入）
オ：灰黄褐色土層（粘性強し、しまり強し、カーボン混入、FA 粒子混入）
カ：灰黄褐色土層（粘性強し、しまり強し、カーボン多址混入、FA ブロック混入）
キ：灰褐色土層（FA ブロック混入）

0 1m

第51図　19号住居カマド実測図

位置　調査地東側に位置している。

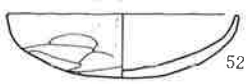
平面形・規模　長辺3.3m、短辺2.8mを測る隅丸長方形であるが、やや西側部分が変則である。主軸方向はN－83°－Eを示す。

周壁　残存状態は良好で、黄褐色土層、黒褐色土層を掘り込んだ状態で壁高約18cmを測る。

床面　粘土を用いた固い貼り床で、厚さが5～8cm程である。面は起伏が少なく平坦である。

カマド　東壁やや南寄りに位置し、壁外に付設する。両袖を有する。平面形は焚口幅約45cm、奥壁中央部幅約55cm、奥行約85cm程の半楕円形状を呈する。燃焼部中央は住居床面より約3cm程低い。覆土中には、下部の粘性の強い灰黄褐色土層の中に多量の炭化物を確認した。

他の遺構　20号住居・4号土壙と重複する。先後関係は、古い順に20号住居、19号住居、4号土壙である。



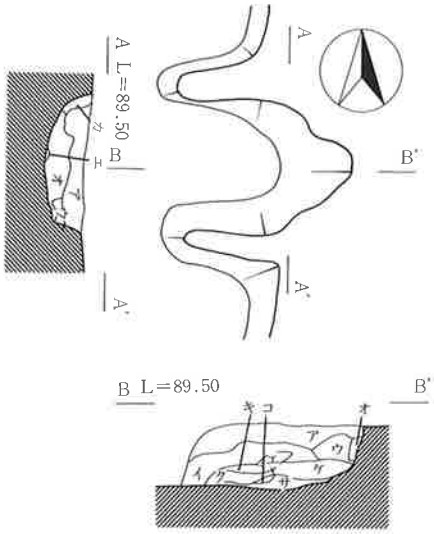
0 10cm

第52図　19号住居出土遺物

第16表　19号住居　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 52 図版	土師器 坏	口径12.2 底径 4.0 残高 3.5	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内部ナデ	石英・小礫・輝石・雲母含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　30%

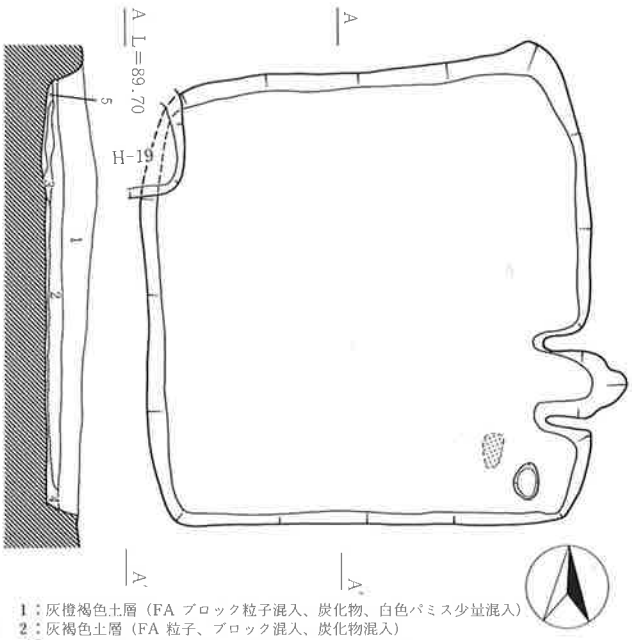
ⓣ　20号住居



ア：灰褐色土層（FA 粒子ブロック、赤色粒子、カーボン混入）
イ：灰緑褐色土層（FA 粒子混入、焼土粒子混入、カーボン混入）
ウ：灰黄褐色土層（FA 多量混入、カーボン、焼土粒子混入）
エ：灰暗褐色土層（FA、カーボン混入）
オ：灰赤褐色土層（FA ブロック少量含む、焼土粒子、ブロック多量混入、白色パミス混入）
カ：灰黄褐色土層（FA ブロック）
キ：灰褐色土層（FA 粒子、カーボン混入）
ク：暗黄褐色土層（FA 粒子、炭化物混入）
ケ：灰黒褐色土層（FA 少量混入、炭化物、焼土多量混入）
コ：灰黒褐色土層（FA、焼土混入）
サ：灰黒色土層（焼土粒子混入、カーボン極めて多量混入、灰層）

0　1m

第53図　20号住居カマド実測図



1：灰橙褐色土層（FA ブロック粒子混入、炭化物、白色パミス少量混入）
2：灰褐色土層（FA 粒子、ブロック混入、炭化物混入）
3：灰黄褐色土層（FA ブロック多量混入、赤色粒子混入）
4：灰黒褐色土層（FA 粒子少量混入、炭化物灰多量混入）
5：灰黄褐色土層（FA ブロック多量混入、赤色粒子、カーボン混入）

0　2m

第54図　20号住居実測図

位置　調査地東側に位置し、19号住居と重複する。

平面形・規模　長辺3.7m、短辺3.4mを測り、長方形を呈する。主軸方向はN—87°—Eを示す。

周壁　黄褐色土層、黒褐色土層を掘り込んだ状態で検出される。残存状態は大変によく、壁高約26cmである。

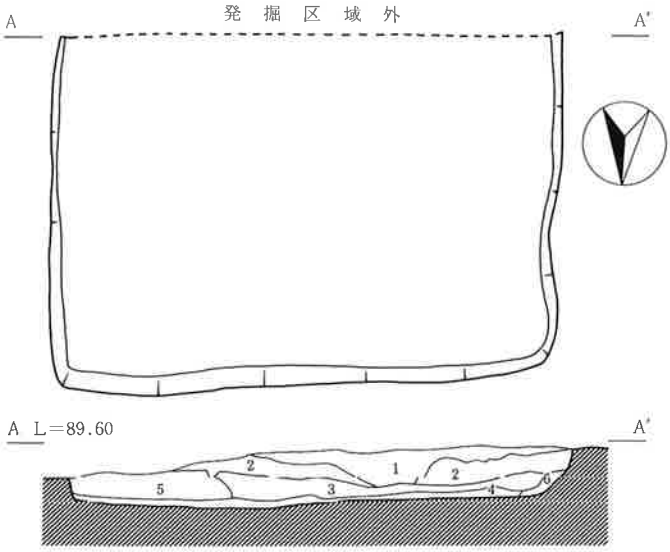
床面　中央から南部にかけては、起伏の少ない平坦な面であるが、北部に約4～5cm程のなだらかな落ち込みがみられる。貼床にはしまりのある褐色の粘土を用いている。

貯蔵穴　南東隅に位置し、規模は長直径30cm、短直径20cmの楕円形を呈し、深さは64cmを測る。

カマド　東壁やや南寄りに位置し、壁外に付設。燃焼部中央は床面より低く、舟底状を呈す。

ⓤ　21号住居

位置　調査地南東隅に位置し、遺構の一部が調査区域外にある。



1：茶褐色土層（少量の FA ブロックを含む、粘性がある）
2：茶褐色土層（多量の FA ブロックを含む、粘性がある）
3：茶褐色土層（多量の FA ブロックを含む、少量の黒色土粒を含む）
4：茶褐色土層（少量の FA ブロックを含む、粘性がある）
5：黄褐色土層（多量の FA を含む、粘性がある）
6：褐色土層（少量の FA を含む、粘性がある）

0 2m

第55図　21号住居実測図

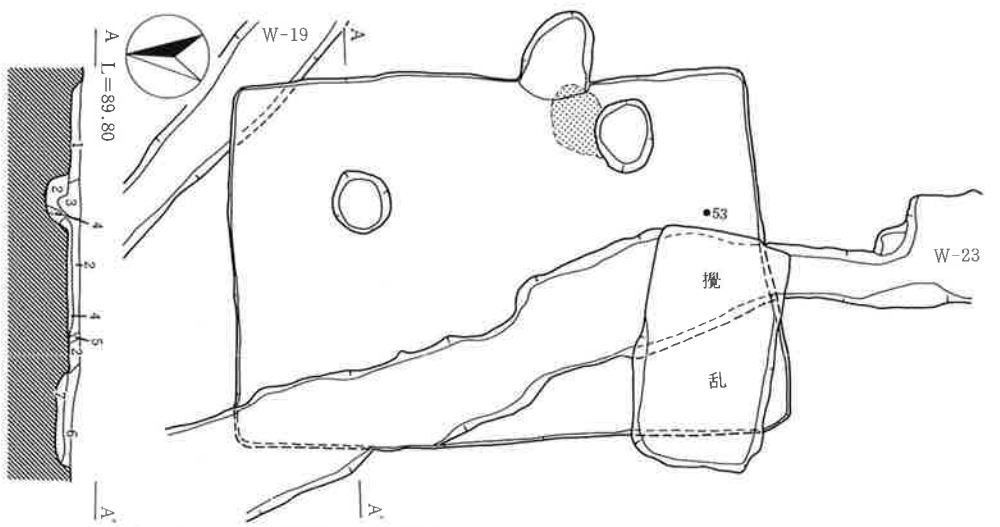
平面形・規模　短辺４m、長辺については、遺構の一部が調査区域外になるため不明瞭ではあるが、検出された住居の長辺と短辺の比から考えると、4.6m程を測ると思われる。平面形も隅丸長方形と考えられる。主軸方向はN—84°—Eを示す。

周壁　残存状態は比較的良好な方で、黒褐色土層を掘り込んだ状態で壁高約13cmを測る。

床面　褐色の粘土を用いた貼床が施されている。水はけが悪いため、しまりや固さは不明瞭である。起伏の少ない平坦な床面である。

遺物　土器小片が数点出土。

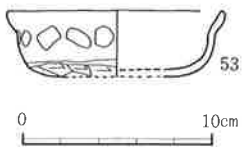
⑤　22号住居



1：茶褐色土層（FA、焼土含む、しまりがある）
2：茶褐色土層（FP、黄褐色粒子含む）
3：黒色土層（混入物なし、粒子密）
4：暗灰茶褐色土層（黄褐色土ブロック粒子、FA 含む）
5：黄褐色土層（粘質土）
6：灰茶褐色土層（茶褐色ブロック、白色粒子含む）
7：灰褐色土層（黄褐色ブロック、黒灰色ブロック含む、灰色砂質ブロック含む）

0 2m

第56図　22号住居実測図



第57図　22号住居出土遺物

位置　調査地中央に位置し、19・23号溝と重複する。

平面形・規模　長辺4.4m、短辺3.3mを測る長方形である。主軸方向はN—80°—Eである。南東隅に貯蔵穴、北東部に不明のピットが検出された。カマド焚口付近に焼土と炭化物の分布がみられる。

他の遺構　先後関係は古い順に19号溝・22号住居・23号溝である。

第17表　22号住居　土器観察表

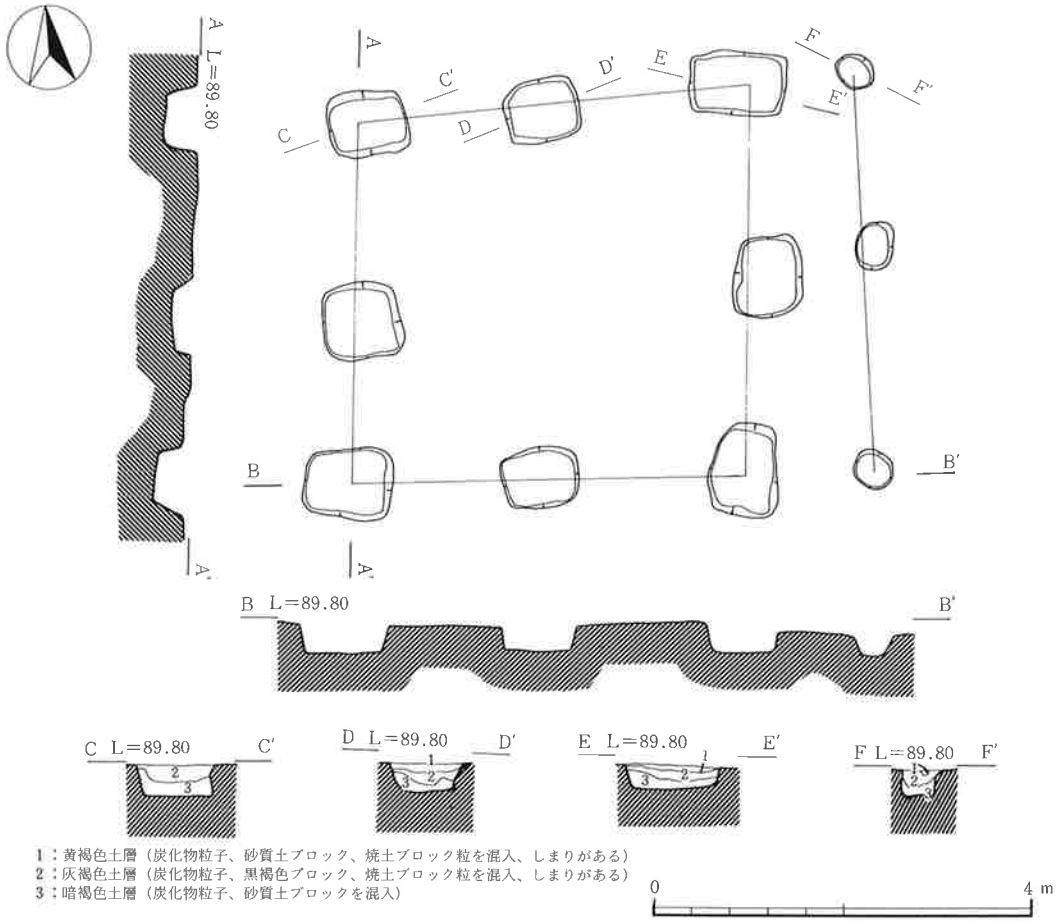
遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 53 図版	土師器 坏	口径11.5 底径 8.0 器高 3.5	口縁部　横ナデ指圧痕、胴部・底部ヘラ削り　内面　横ナデ一部指圧痕有り	雲母・小礫・輝石少量含有	色調　褐色 焼成　良好 残度　40% 口縁部にゆがみ有り 一部二次焼成有り

第18表　住居跡一覧表

番号	形状	規模(m)	主軸方向	カマド	貯蔵穴	時期	備考
1	隅丸長方形(推)	3.5 × 3.2(推)	N—91°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
2	不明	不明	N—89°—E	あり 東壁	不明	国分期	
3	隅丸長方形	3.2 × 2.6	N—91°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
4	隅丸長方形	4.3 × 3.3	N—94°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
5	隅丸長方形	4.2 × 3.2	N—91°—E	あり 東壁中央	なし	国分期	
6	隅丸長方形	5.1 × 3.4	N—96°—E	あり 東壁中央	なし	国分期	
7	隅丸長方形(推)	4.2(推)× 3.4	N—97°—E	不明	不明	国分期	
8	隅丸長方形	3.6 × 2.7	N—86°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
9	隅丸長方形	3.9 × 3.1	N—91°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
10	隅丸長方形	3.4 × 2.8	N—87°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
11	長方形(推)	3.7(推)× 3.6(推)	N—94°—E	不明	不明	真間期	遺構の一部調査区域外
12	隅丸長方形	4.1 × 3.2	N—90°—E	あり 東壁中央	なし	国分期	
13	隅丸長方形	3.8 × 2.2	N—85°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
14	隅丸長方形	3.0 × 2.6	N—86°—E	あり 東壁南寄り	あり	国分期	貯蔵穴　南東隅楕円形
15	隅丸長方形	4.5 × 3.0	N—76°—E	あり 東壁南寄り	あり	国分期	貯蔵穴　南東隅楕円形
16	隅丸長方形(変則)	5.0 × 3.7	N—83°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
17	隅丸長方形	4.3 × 2.2	N—96°—E	あり 東壁中央	なし	国分期	
18	長方形	3.9 × 3.2	N—80°—E	あり 東壁南寄り	なし	国分期	
19	隅丸長方形	3.3 × 2.8	N—83°—E	あり 東壁南寄り	なし	真間期	
20	長方形	3.7 × 3.4	N—87°—E	あり 東壁南寄り	あり	鬼高III期	貯蔵穴　南東隅楕円形
21	隅丸長方形(推)	4.6 × 4.0	N—84°—E	不明	不明	国分期	遺構の一部調査区域外
22	長方形	4.4 × 3.3	N—80°—E	あり 東壁南寄り	あり	国分期	貯蔵穴　南東隅楕円形

(2) 掘立柱建築跡

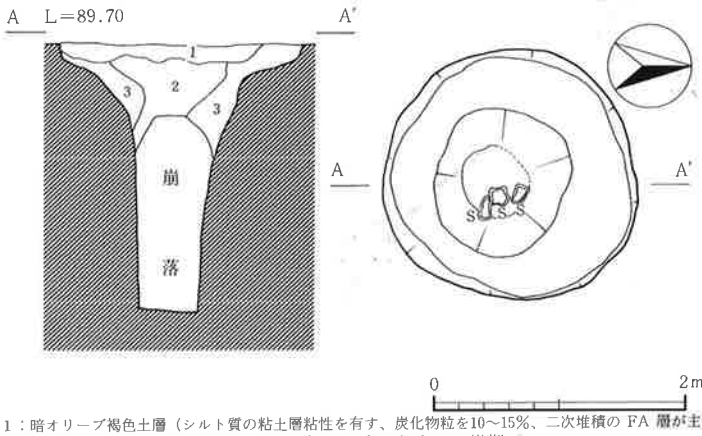
調査地北西部に1号掘立柱建築跡、中央北部に2号掘立柱建築跡が検出された。桁行柱間と梁間柱間は、1号、2号とも統一されておらずばらつきがある。



1：黄褐色土層（炭化物粒子、砂質土ブロック、焼土ブロック粒を混入、しまりがある）
2：灰褐色土層（炭化物粒子、黒褐色ブロック、焼土ブロック粒を混入、しまりがある）
3：暗褐色土層（炭化物粒子、砂質土ブロックを混入）

第58図　1号掘立柱建築実測図

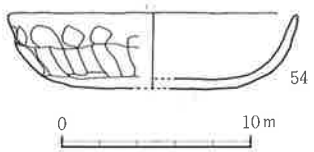
(3) 井　戸　跡



1：暗オリーブ褐色土層（シルト質の粘土層粘性を有す、炭化物粒を10～15%、二次堆積の FA 層が主体）
2：暗褐色土層（シルト質の粘土層、粘性を有す、下部は水圧により崩落）
3：暗オリーブ褐色土層（シルト質の粘土層、やや粘性を有す、黄褐色土ブロックを20%前後含む）

第59図　1号井戸実測図

調査地中央に位置し、平面は円形、断面は上半部がロート状で下半部がU字形である。上端径1.94m、下端径46cm、深さ2.1mo

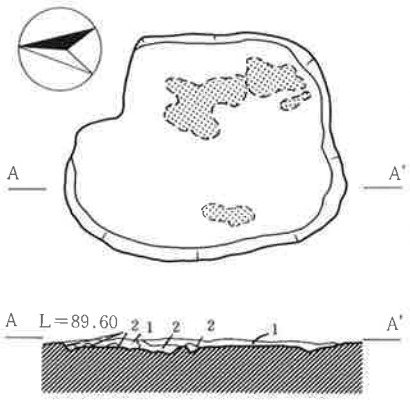


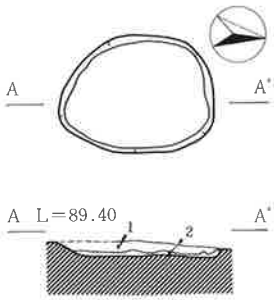
第60図　1号井戸出土遺物

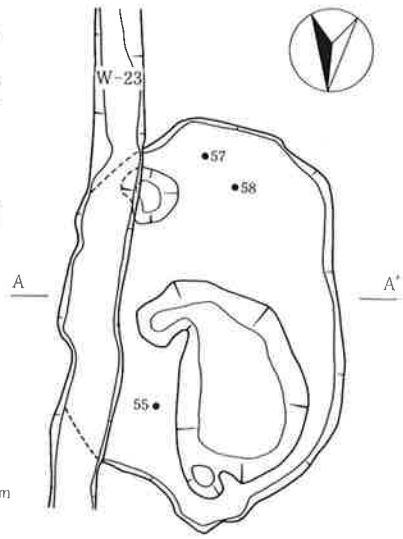
第19表　1号井戸　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 54 図版	土師器 坏	口径15.4 底径10.0 器高 4.0	口縁部　横ナデ指圧痕、胴部・底部ヘラ削り　内面　横ナデ指圧痕有り	石英・雲母・小礫・長石・輝石含有	色調　褐色　残度　40% 焼成　良好 口縁部ゆがみあり

(4) 土　　壙

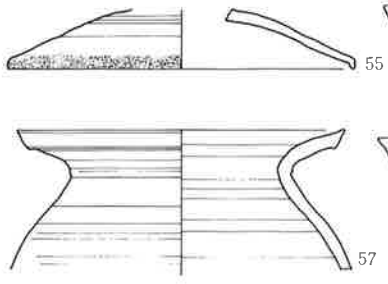




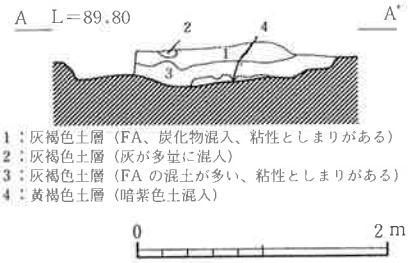


第61図　1号土壙実測図

第62図　4号土壙実測図



第64図　3号土壙出土遺物

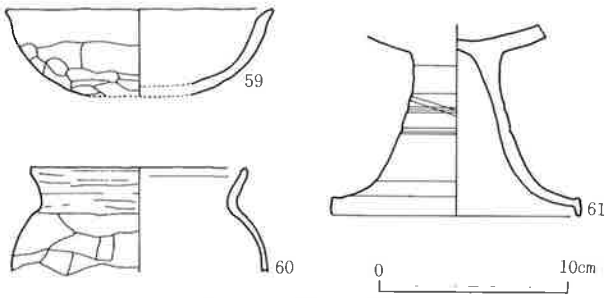


第63図　3号土壙実測図

第20表　3号土壙　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考
挿図 55 図版	須恵器 蓋	口径 9.2 残高 3.2	回転ロクロ成形	雲母・長石・小礫含有	色調　灰色　残度　50% 焼成　良好 外面・内面に自然釉有り
挿図 56 図版	土師器 坏	口径12.2 底径 7.5 器高 3.5	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面　横ナデ指圧痕有り	石英・雲母・砂粒・輝石含有	色調　赤褐色 焼成　良好 残度　30%
挿図 57 図版	須恵器 甕	口径17.0 残高 7.3	口縁部・胴部・内面　回転ロクロ仕上げ	雲母・小礫少量含有	色調　青灰色 焼成　良好　残度　10%
挿図 58 図版	土師器 坏	口径11.7 底径 7.4 器高 3.8	口縁部　横ナデ、胴部・底部　ヘラ削り、内面ナデ	長石・雲母・輝石・小礫含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　75%

(5) 溝　　跡



第65図　溝出土遺物

調査地から溝30条を検出した。2・9・23号溝は、調査地内では比較的大きな溝で、確認面で上端幅がともに約1.6mを超えている。溝方向は南東と南北方向に走る傾向がみられる。時期は平安時代が大部分で、その外古墳、奈良、中世以降の溝が数条確認された。

第21表　2・20・23号溝　土器観察表

遺物番号	器種	法量(cm)	技法等	胎土	備考	
挿図59 図版	土師器 坏	口径14.2 底径 5.4 残高 4.7	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ	雲母・砂粒・長石・輝石含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　30%	W－2
挿図60 図版	土師器 甕	口径11.6 残高 5.8	口縁部　横ナデ、胴部　ヘラ削り、内面　横ナデ　一部指圧痕有り	雲母・小礫・輝石・石英少量含有	色調　茶褐色 焼成　良好 残度　15%	W--23
挿図61 図版	須恵器 高坏	底径13.2 残高10.1	回転ロクロ成形	雲母・長石・小礫含有	色調　灰色 焼成　良好 残度　50%	W－20

第22表　溝　一　覧　表　　（単位　cm）

番号	上端幅	下端幅	深さ	形状・方向	時期
1	128	60	45	N－111°－E	平安時代
2	160	122	20	N－118°－E	平安時代
3	72	28	30	N－149°－E	平安時代
4	52	36	11	N－124°－E	平安時代
5	84	45	15	N－169°－W	平安時代
6	72	52	15	N－131°－E	平安時代
7	56	36	20	N－177°－W	平安時代
8	48	36	21	N－179°－W	平安時代
9	192	48	28	N－144°－W	中世以降
10	28	18	8	N－147°－W	平安時代
11	34	22	8	N－109°－E	平安時代
12	50	34	18	N－ 95°－E	平安時代
13	76	44	22	N－146°－E	中世以降
14	36	22	10	N－ 95°－E	平安時代
15	62	40	18	N－116°－E	平安時代
16	22	10	29	曲線状	平安時代
17	36	28	10	N－175°－E	平安時代
18	148	不明	不明	N－103°－E	平安時代
19	70	52	20	曲線状	平安時代
20	42	24	18	N－101°－E	奈良時代
21	36	20	15	N－ 98°－E	奈良時代
22	44	26	14	曲線状	古墳時代
23	190	180	25	曲線状	平安時代

24	84	60	13	曲線状	古墳時代
25	72	38	18	N−173°−W	平安時代
26	132	108	35	N−177°−W	平安時代
27	54	28	41	N− 96°−E	平安時代
28	60	32	35	N−101°−E	平安時代
29	80	52	28	N−102°−E	平安時代
30	68	48	32	N−174°−E	古墳時代

(6) 水　田　跡

遺構の標高は約89.70～90.08mであり、北西から南東へゆるく傾斜をもっている。畦畔は1号溝に沿って幅約80～160cm、厚さ約3～8cm、長さ約28mにわたって確認された。畦畔方向はN−111°−Eである。形状については、北西から南東にかけての畦畔のみで、その外に畦畔は検出されておらず不明である。畦畔を形成している土壌は、水田の土壌と同じ赤黄褐色粘質土層である。この遺構については、調査範囲が狭く不明瞭な点が多いため、今後の調査をもとに検討を要する。

III　ま　と　め

今回の発掘調査によって、本遺跡地は古墳時代から中世における遺構、遺物を有する複合遺跡であることがわかり、下記のような成果を収めることができた。

○　竪穴住居については、古墳時代1軒、奈良・平安時代21軒、合計22軒が確認され、判明した特色、傾向を列記すると次の通りである。

古墳時代の竪穴住居は、鬼高III期でやや規模が小さい。詳細は一覧表の通りである。

奈良・平安時代の住居では、①時期は真間期から国分期。②形状・規模は平均して長辺3.9m、短辺約3.1mの隅丸長方形。③長辺と短辺の比は1.0～2.0が多い。④面積は約7.8～18m²が一般的。⑤長軸方向はN−76°−EからN−97°−Eに集中。⑥カマドは東壁やや南寄りに付設し、構築材として川原石とFAを使用。⑦貯蔵穴は14、15、22号住居南東隅に確認。⑧柱穴は未確認。⑨6号住居からは土錘が出土。

○　掘立柱建築跡2軒、井戸跡1基、土壙4基、溝跡30条、水田跡が検出された。掘立柱建築跡と土壙は、使用目的については不明である。調査地東側では、B軽石に埋れた1・7・8号溝と1号溝に沿って検出された畦畔とみられるたかまりから、平安時代末期の水田跡の存在が考えられ、食料生産との関連もとらえることもできる。

以上のことから、この調査地における古墳時代から中世にかけての各時期の住居の作りや生活道具等、当時の人々の生活様式を知ることができた。また、西側の古代条里制遺構の痕跡、検出水田跡、土錘出土等から、米の生産地であるとともに北東部を流路とした旧利根川を漁業地とした生活を営んでいたことが考えられ、当時の人々の生活と生産の関連もとらえることができた。

図版 1

試堀調査区全景

発堀調査区全景

1 号住居跡

手前から 4 号住居跡 8 号住居跡

6 号住居跡

手前から12・ 5 ・ 7 号住居跡

9 号住居跡

10号住居跡

図版 2

11号住居跡（手前は10号住居跡）

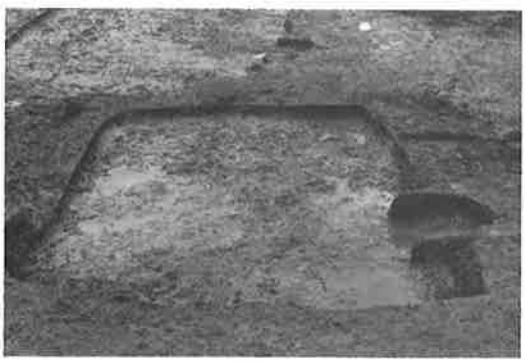
13号住居跡

14号住居跡

15号住居跡

16号住居跡

17号住居跡



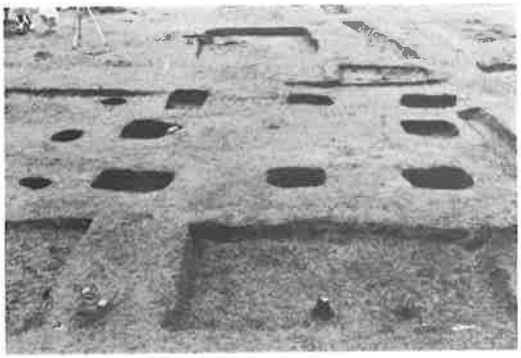
18号住居跡

手前から19・20号住居跡（住居跡内に 4 号土壙）

図版 3

21号住居跡

22号住居跡



1 号堀立柱建築跡

1 号井戸跡

2 号土壙

1 号溝

水田跡

現地説明会

図版 4

1

2

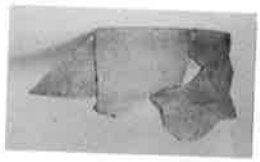
3

4

5

6

7


8

9

10

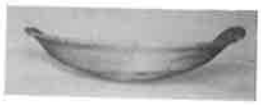
11

12

13

14

15


16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

図版 5

31

32

33

34

35

36

37

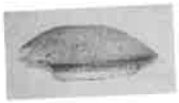
38

39

40

41

42


43

44

45

46

47

50

48

49

53

51

52

56

54

55

59

58

57

60

61

後　閑　II　遺　跡

昭和59年３月31日　印刷
昭和59年３月31日　発行

発行　前橋市教育委員会
前橋市大手町二丁目12－１

印刷　朝日印刷工業株式会社
前橋市元総社町67

1-10
201
4